

甲子園ホテルの企画・設計理念の背景 その2

—「利他」を視点とした同時代の計画案との比較から—

生活美学研究所研究員 黒田 智子

1. はじめに

1-1 甲子園ホテルの建築表現における「利他」—密教との関わり

甲子園ホテルのシンボルマークである打出の小槌は、ホテルが開業した昭和初期には、ご利益信仰を表わす図像として人々に親しまれていた。打出の小槌はそれを手に握る大黒天と共に、衣食から金銭まで、日々の暮らしに利益と富をもたらしてくれる祈りの対象として、人々の生活と共にあった。したがって、ホテルの経営者や利用客にとって、打出の小槌のシンボルマークは、自己を利する「利己」（仏教においては「自利」）としてのご利益を表わしたと捉えられるだろう。一方、甲子園ホテルは、打出の小槌をモチーフとする抽象・具象の様々なバリエーションを持った建築装飾を持ち、その形態と空間の關係に着目して読み解くと、そこには、ホテル滞在者だけでなく、地域住民を含んで広く他者を利する「利他」の考え方が読み取れた¹⁻¹⁾。つまり、甲子園ホテルの建築表現は、「利己」と真逆の「利他」に方向づけられていたと推察されるのである。

そこで、前稿では、「利己」に対する「利他」について打出の小槌や大黒天に関する信仰や習俗を考察した。特に信仰の根本としては、最古の大黒天とされる比叡山延暦寺の大黒天との關係を「利他」の視点から考察した。そして、甲子園ホテルを構想・企画し、常務取締役兼支配人をつとめた林愛作（1873-1951）と、日本美術史を開拓したアーネスト・フェノロサ（1853-1908）とは、フェノロサの晩年において深い交流があった可能性に着目した。フェノロサがニューヨーク山中商会に出入していた頃、林は主任として活躍していた。そして、1908（明治41）年、ロンドンで客死したフェノロサの遺骨を遺言にしたがって長等山園城寺（以下、三井寺とする）に埋葬することに尽力したのである。また、フェノロサは、やはり日本美術史上著名な岡倉天心（1863-1913）と同様に、三井寺法明院阿闍梨であった櫻井敬徳（1834-1926）のもとで得度受戒をしていたのである。延暦寺も三井寺も共に天台宗という共通点がある。そして、天台宗は、密教、つまり秘密仏教、密なる教えであり、本来その教義は、在家の者には語ることでできない秘密とされる。一方、明治の廃仏毀釈によって著名な寺院が手放した仏教美術の名品を、欧米の愛好家が納得できるように論理的に説明するためには、その背後にある教義上の意味を知る必要がある。したがって、仏教美術の意味を深く知ろうとすればするほど、秘密の教義に触れざるを得ず、それが、フェノロサらの得度受戒へと繋がった要因のひとつと考えることができるのではないかと思う。

そうであるならば、晩年のフェノロサと美術商として深く関わった林愛作は、自らキリ

スト教徒という壁を越えて、仏教徒のフェノロサから、日本の美術骨董品を見る目を大きく開かれたのではないだろうか。さまざまな美術品の中でも、特に仏教美術は最高とされるといわれる。同時に、「利他」の真心は、機に応じ、出家と在家を隔てる垣根を越えるともいわれるからである。フェノロサが亡くなった翌年、日本に帰国し、支配人として腕を振るうだけでなく新ホテルの建設を条件に帝国ホテルに勤務してからの林は、ホテルのサービスや和洋の生活文化と共に、当然日本の伝統建築に目を向ける必要に迫られたと考えられる。その中には、寺院建築も含まれたであろう。また、三井寺でフェノロサのために周期ごとに行われる法要には、常に名を連ねていた林であれば、フェノロサとの交流の記憶を反芻したと推察されるのである。

一方、遠藤は、東京帝国大学で伊東忠太に学び、明治神宮造営局に勤めて、実践的立場からも日本の社寺建築の伝統に触れた。フランク・ロイド・ライトのチーフアシスタント時代には、日本建築に関するライトの疑問や興味に応える存在としても頼りにされていた。さらに独立前から、「人の心と交渉する建築」を標榜した。またキリスト教徒であると同時に、義母を通じて、天台宗に触れる機会があったと考えられ、その点で、林と通じ合うものがあつたのではないかと思う。

1-2 生活環境の計画・設計が基本とする「利他」—建築および敷地条件との関わり

ところで、建築・住宅・庭園・都市など生活環境の企画・計画・設計に視点を向けると、絵画や彫刻とは異なる表現の方向性が見えてくる。近代以降、絵画や彫刻のようないわゆるファインアートは、作者である画家や彫刻家自らの心の中を外に表わすこと、つまり「自己表現」を第一とする。それに対して、建築・住宅・庭園など、生活のための空間は、作者である建築家やデザイナーのためではなく、出資者である施主のためだけでなく、利用者としての他者のために存在するといえるだろう。同時に、それらは、存在することによって、必然的に周辺地域の景観や人々の生活の構成要素となり、その意味で生活環境の一部となる。それを少しでも良き存在にしようとするのは、建築家をはじめ作家や計画家の願いであり理想でもあるだろう。そのような立場は、密教に深く蔵された「利他」の観念を改めて持ち出すまでも無く、もともと「利他」に立脚するといえるだろう。

そうであるならば、甲子園ホテルに読み取れる「利他」は、通常建築が持つべき「利他」と、本質的な違いがあるのだろうか。もし違ふとすれば、それは密教との関りに迫るような違いなのだろうか。本稿は、このような問題意識から始めたい。

甲子園ホテルの施主であった阪神電気鉄道（以下、阪神電鉄とする）は、最初から林愛作を招聘して新ホテルの構想・企画を依頼し、その設計を行う建築家の指名をも委ねたわけではなかった。林以前に、設楽貞雄（1864-1943）、大屋霊城（1890-1934）、武田五一（1872-1938）など、当時、第一人者として主に関西を中心に活躍していた建築家や都市計画家にも継続的に案を求めていたのである。それらの開発計画の敷地は、武庫川の支流、枝川とさらにその支流の申川を廃川とした広大な区域にあった。この開発地において、甲

子園ホテルは、武庫川から分岐して枝川が始まるその付け根に位置している（図1-1）。一方、大屋、武田らのホテルは、かつて枝川が海に注いだ海岸付近に位置していた。水の流れに着目すると、甲子園ホテルは、枝川の最上流、大屋のホテルは最下流に位置することが一目瞭然である。この違いは、甲子園ホテルにみられる建築的特徴や設計趣旨と関係するのではないかと推察される。敷地を選定したのは、電鉄側ではなく、林愛作が自ら足を運んで決めたという。また、遠藤新は、師・フランク・ロイド・ライト（1867-1959）と同様、常に敷地と建築との調和を大切にして設計を行ったからである。

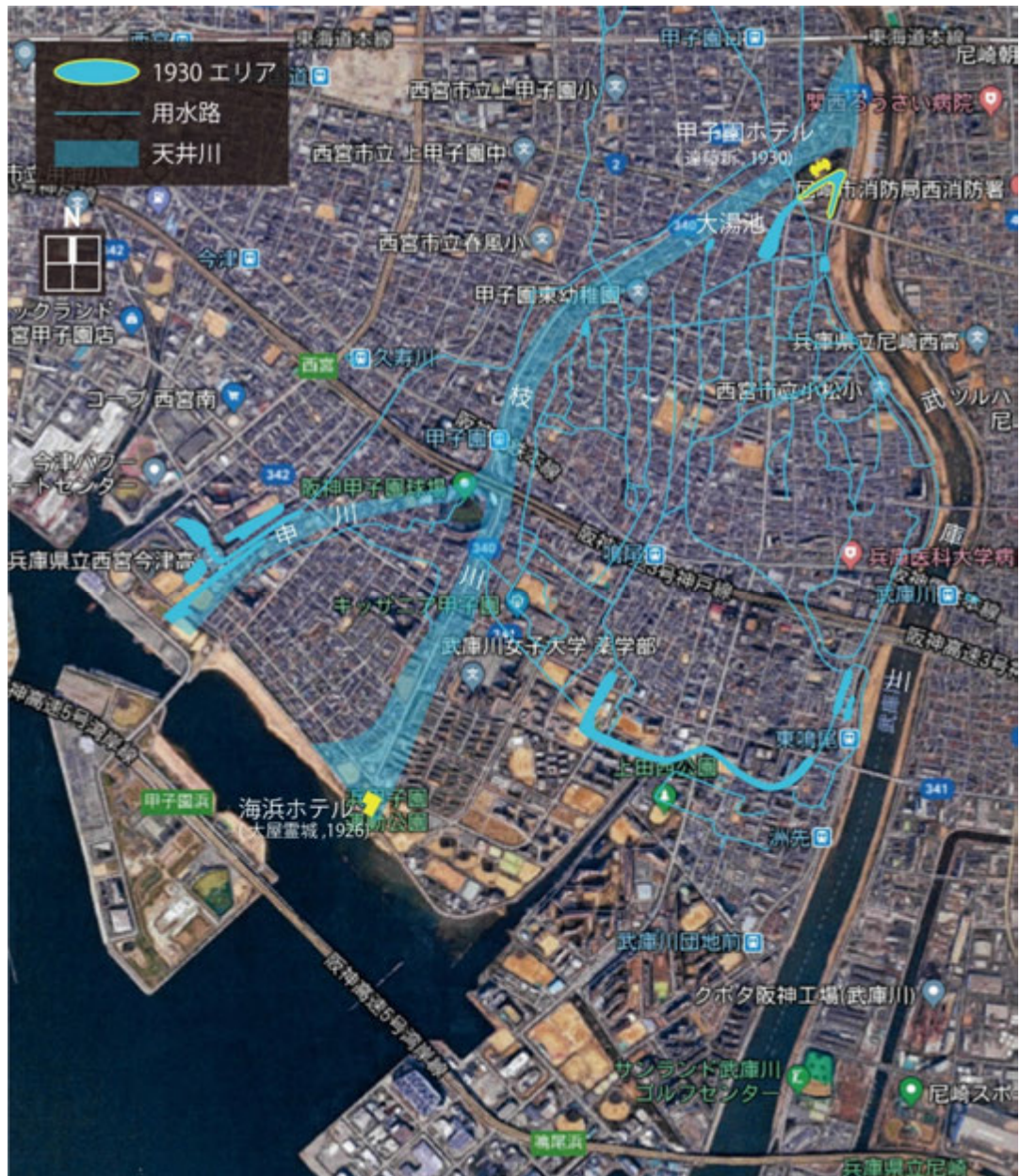


図1-1 枝川・申川および農業用水路と2つのホテルの位置

1-3 研究の目的と方法

本稿では、まず、阪神電鉄がホテル建設を発案した背景と、新開発地における林愛作の敷地選定について概観する。次に、林の招聘以前に、すでに電鉄側に提案された計画案の中から大屋霊城によるホテル案を取り上げ、その特徴について考察する。これらを踏まえて、林・遠藤による甲子園ホテルと、大屋のホテル案を、「利他」を視点に比較し、両者の違いを明らかにしたい。具体的には、誰を対象としたホテルなのか、どのようなアクティビティが可能で、そのためにどのような空間や場所が提供されるのか、周辺環境、景観とはどのような関係があるのか、などについて比較を行う。

大屋による海浜のホテルは、新開発地全体のために大屋自身が提案した甲子園花苑都市の中に計画された。それに対して、甲子園ホテルは、開発地計画を伴わず、単体として提案され実現したホテルであるという違いがある。そこで、本稿では、まず、大屋のホテルについて、都市計画的背景と共にその特徴を考察する。それを踏まえて、甲子園ホテルとの比較をおこなうことにする。

主として大屋霊城、林愛作、遠藤新が残した言説・図面などを対象とし、必要に応じて、阪神電鉄社史、当時の新聞記事をはじめ関係資料を参照する。詳細は、第4章に述べる。

2. 阪神電鉄による甲子園開発地とホテル計画

2-1 新開発地における住宅地と娯楽地

甲子園の開発は、阪神間の地域開発を牽引した阪神電鉄が手掛けた中で、最大規模のものである。また、総合的開発事業としても、最初のものである。甲子園開発地は、1922（大正11）年、兵庫県が阪神電鉄に410万円で譲渡した枝川・申川廃川敷22万4000坪（約6.8ha）がもととなっている。同年、さらに、阪神電鉄は、枝川と申川の分岐点の南側に二つの川に挟まれる三角地帯の買収を進めた。甲子園ホテルが完成した1930（昭和5）年には、さらなる用地買収が進み、1930年代半ばには総面積は42万4900坪（約12.9ha）となり、もとの面積の倍に迫る規模に至った（図2-1）。



図 2-1 甲子園開発地の用地取得と 2 つのホテルの位置 (1922-1935)

阪神電鉄は、これらの廃川敷について、計画案を建築家・都市計画家に求める以前から、およその全体構想を持っていた。例えば、1910（明治 43）年、欧米を視察した当時の技術長三崎省三（後、専務）は、武庫川流域をハドソン川やテムズ川に見立て、鳴尾村の海岸をブライトンやコニー・アイランドなどのような遊覧地とし、枝川を住宅地にするという構想を持っていた。また、娯楽の一環として野球、ラグビー、テニスなどのスポーツ施設建設にも積極的な考えを持っていた。特に野球場には意欲的で、土地の買収契約締結の 1 年前に社員をアメリカに派遣し、ニューヨークジャイアンツのポログラウンドの設計図を入手しているほどである。1924（大正 13）年竣工した甲子園球場（計画当時は枝川運動場、

完成時は甲子園大運動場と呼んだ)は、申川の付け根の三角地帯に土地を買い足して実現した最初の施設である。

高校野球で全国に知られる「甲子園」の名称は、阪神電鉄の重役会で決定したものだという。当時、入社して間もなかった野田誠三(後、社長)は、その経緯を以下のように述べている。

「(球場の)工事中に何か名を考えるとと言われて、僕らもいろいろ案を出したが採用されずに、結局重役会のほうでつけられた。・・・ご承知のように六甲山が付近にあって、甲陽だとか、甲南だとかいっているが、その「甲」とは意味が違うからね。大正13年が甲子の年だった。甲子とは十干、十二支の各々の初めの甲(きのえ)と子(ね)で、これは61年目に還ってくるのですが、ちょうどその年でしたので「甲子園」と命名されたのです²⁻¹⁾。」

この「甲子園」が、野球場の名称としてだけでなく、後には、新開発地全体の名称となったのである。それは、甲子園球場の完成時ではなく、4年後、住宅地の分譲と甲子園ホテルの設計が開始した1928年頃からで、当時は、「甲子園経営地」と称していた。本稿では、この開発地を、「甲子園開発地」と呼ぶことにする。その中で運動施設や娯楽施設を有する枝川・申川廃川敷とそれらに挟まれた三角地帯は、阪神電鉄の呼称に倣い、「遊覧地」、比較的大きな区画で分譲された阪神電鉄線以北を「住宅地」と呼ぶことにする(図2-1)。

開発地の事業計画と用途計画は、当然ながら密接しており、その方針を具体化するにあたって、阪神電鉄は、3人の専門家に計画・設計を依頼した。3人とも第一線に立つ専門家として関西で活躍しており、甲子園開発地の計画については、施主である阪神電鉄の意向からと思うが、建築単体よりも、むしろ、遊覧地の計画に力点を置いたところに共通点がある。まず、設楽貞雄(1864-1943)は、娯楽施設についての設計経験が豊かで、単体として通天閣(1912)の設計だけでなくそれを含む新世界(1912)全体の地区計画を行っている。枝川、申川が兵庫県から阪神電鉄に譲渡された翌年、早くも設楽が発表した「一大文化村」(1923)のキャッチコピーは、「武庫川廃川地に建設の何でも日本一の文化村」である。これに沿い、翌年開場する甲子園球場をはじめ、遊覧地の運動施設は、当時、規模、数などで、日本一、東洋一、あるいは世界一であった。阪神電鉄の意気込みが感じられる。設楽の「一大文化村」がホテル計画を含んでいたのかどうかは確認できなかったが、ホテルについても日本一を目指す機運があったと想像される。

次に、「甲子園花苑都市」(1926)を提案した大屋霊城(1890-1934)は、遊覧地の魅力の一つとして海辺にたつ大規模なリゾートホテルを提案している。大屋は、遠藤新とほぼ同世代である。大阪府の技師として関西を拠点に活躍し、数多くの公園・緑地と都市の計画・設計を行った。同時に、実践に基づく論考を、新聞・雑誌に数多く発表したことでも知られる。特に、1921(大正10)年から翌年にかけて、都市の視察のため、欧米で1年を過ごしている。その際、エベネザー・ハワード(1850-1928)が自らの理論の実践としてレッチワース(1903-)と、それに続けて実現したばかりのウェリン(1919-)を訪ね、実際にハワードと言葉を交わしている。大屋の甲子園花苑都市計画は、これらの経験を踏まえ

た提案として位置づけられる。

それを引き継いだ「甲子園大遊園計画」(1926)は、武田五一(1872-1938)によるものである。当時、武田は、京都帝国大学建築学科の教授を務め、やはり関西を中心に活躍していた。「関西建築界の父」ともいわれ、京阪神に多くの住宅や公共建築を設計していた。武田もまた、リゾートホテルを海辺に提案している。

2-2 林愛作の招聘とホテルの敷地選定

阪神電鉄にとって、新開発地におけるホテルの建設は、遊覧地を訪れる人々の宿泊施設として、甲子園球場をはじめとする運動施設や他の娯楽施設と同様に重要であったと考えられる。ホテルの設計自体は、建築家として経験豊かな設楽貞雄や武田五一に依頼する意向も電鉄内にはあったのではないかと思う。しかしながら、1927年に社長に就任した島徳三は、建築家ではなく、まずは、支配人としての経験をもつ林愛作を招聘し、新ホテルの建設と運営を任せただった。特にホテルについてみると、設楽や武田に十分な設計の経験がないことを懸念したからかもしれない。また、島が社長に就任した1927(昭和2)年、すでに、設楽、大屋、武田の計画案は出そろっていた。そこに、自ら新社長としての存在感をアピールすることを考えたのかもしれない。何よりも、現実の経営を考えた場合、社内に、ホテルに精通した人材が見当たらなかったことが大きな理由だったのではないだろうか。

甲子園の開発事業について、阪神電鉄は、外部の専門家に一任するのではなく、社内に案件をよく把握している人材を置いて来た。甲子園球場に関しては、車輛課長をアメリカに派遣し、入社間もない野田誠三(後、社長)に、グラウンドの土質、観客の収容人数から、選手の使用に適った細部の寸法に至るまで必要な情報を収集させたという。

もし、阪神電鉄が、京阪神に開業していた既存ホテルに倣うことで満足すれば、同様に新ホテル建設のために社員を抜擢することで対応できたかもしれない。しかしながら、最大規模にして最初の複合的開発事業である遊覧地開発の、しかも核となるホテルの建設となると、同じやり方には踏み切れなかったのではないだろうか。やはり、ホテル経営の専門性を重く見て、文化的、経験的にもホテルについてよく知る者が必要だと考えたのではないかと思う。

もちろん、ホテルの支配人としての人材は、当時少なからず存在したであろう。しかしながら、帝国ホテル・ライト館のような建築を実現した経験となると、林愛作の右に出る者がいないことは誰の目にも明らかであったと思われる。本館の火事の責任を取る形で帝国ホテルを退いてから、ほぼ5年が過ぎようとしていた1927(昭和5)年、島徳三は、そんな林を阪神電鉄に迎えたのである。

しかしながら、林の敷地選定は、阪神電鉄側にある種の違和感を残したように思う。林を招聘した島社長でさえも、当初、ホテルは遊覧地のある海岸に建設するという従来からの電鉄内の考えに同調していたのだ。林らと一緒に候補地を見に行った野田誠三は、次の

ように回想している。

「あれは廃川地を買ったとき、海辺に大きな海浜ホテルをつくる考えで（中略）当時の社長は、島徳蔵さんですが“よろしい、やろう”ということになり、誰にやらそうかと人選をしていたところ、ちょうど東京の帝国ホテルの専務（ママ）をしていた林愛作という人が専務を辞めておられたので、その人に白羽の矢をたて、呼んできて計画を説明し、浜辺の候補地を見に行った。私もいっしょに行ったが、林さんは、“こんなところは珍しくない”というので、上手の今のホテルのところへ行った。ここは武庫川河畔で松林も鬱蒼としており、前には池があり、結局ここに決まった²⁻²⁾。」

この時、すでにホテルは、前述の大屋霊城や武田五一によって、遊覧地の中の海辺の一大ホテルとして計画されていた。同時に、遊覧地には、欧米に引けを取らない、東京と日本一を競り合う、規模、数などで世界一など、それぞれに設楽の「何でも日本一」に沿う特別感をアピールした運動施設が建設されつつあった。したがって、遊覧地は、電鉄関係者が特別な誇りを持つ場所だったと思う。ところが、その遊覧地にあったホテルの候補地を見て、林愛作が述べた「こんなところは珍しくない」という感想は、その特別感をも否定しており、驚きとともに少なからず反感を呼んだかもしれない。

また、電鉄関係者は、もし、海辺に大ホテルができたとすれば、形態的にそれがどんなデザインであれ、水平線を見晴らす開放的な眺望を前に、明るい光の中に立つイメージを共有していたことだろう。それに対して、林が選んだのは、海辺の明るさに対して鬱蒼とした松林、ホテルが面するのは、広々とした海の代わりに、松林に囲まれた池、という相対的に暗く閉鎖的なものである。しかも、神社仏閣の参道などを例外として、欧米に規範を求める当時の都市計画において、針葉樹は、街路樹や庭木として不適當と捉えられる傾向があった。明治時代に帝都の新都市計画に用いられた松は、大正期を経て昭和に入り、古めかしいイメージを引き受けていたといえるかもしれない。そうであるならば、林の敷地選定に対して、甲子（きのえね）が告げる61年目に廻り来た新時代にふさわしい、とは素直には思えない者もいたのではないかと思う。

1930（昭和5）年、遠藤新は、師ライトに7月16日付の手紙を出している。同年4月15日に開業したホテルについて、図面や写真などを別便で送る旨を伝え、共にホテル完成に向けて最善を尽くした林について、次のように述べている。

「大阪に来ると、彼は確かに、水に落ちた一滴の油です²⁻³⁾。」

ホテル運営の仕事を進める上で、悉くといってもよいほどの相違が林と大阪の実業界の間にあったことを表しているように思う。

林愛作は、群馬県出身である。19才で渡米し、アメリカで過ごした17年の最後の8年を、ニューヨークの山中商会において美術骨董商として勤務した。日本に帰国後は、東京において、帝国ホテルのために13年間献身した。関西文化と相入れない感性や考え方を持っていたとしても不思議ではないのかもしれない。しかしながら、林にとって、敷地の選択は、決して個人的な好みの範囲ではなく、甲子園ホテルのあるべき姿への責任と確信

に満ちたものだったはずである。それは、実業家としてホテルを成功させようという並々ならぬ意欲と使命感に裏付けられていたはずである。やっと完成した帝国ホテル・ライト館で、支配人としての腕を振るう機会がなかった林にとっては、甲子園ホテルの建設と運営もまた、甲子（きのえね）に自らの再出発を重ねる希望に満ちたものだったと想像される。

池を介して松林の間からホテルを望むアングル（図 2-2）は遠藤新が好み、雑誌寄稿の際に繰り返し用いた。それは、甲子園ホテル開業当時のリーフレットの裏表紙にも用いられている（図 4-4）。このリーフレットは、遠藤と林の合意のもとにデザインされたと考えられ²⁻⁴⁾、二人にとって、松林と池は、共通に重要な立地条件であったといえるだろう。



図 2-2 南面する池から松林の間に建つ甲子園ホテルを望む

3. 大屋霊城による甲子園花苑都市とホテル案

大屋霊城のホテル案は、建築単体としての提案ではなく、「甲子園花苑都市」と自ら名づけた都市計画の一環としての提案である。そして、甲子園花苑都市は、自らが構想した都市計画理念である「花苑都市」の甲子園開発地における実践なのである。したがって、本章では、まず、大屋が花苑都市という着想に至った経緯を概観し、次に、花苑都市によって解決しようとする問題と、花苑都市における市民の生活と空間の特徴を考察する。それを踏まえて、甲子園花苑都市の全体構成とホテルの位置する遊覧地の特徴を考察する。最後に、海浜ホテルが滞在客とする対象、彼らへの「利他」としてホテルが提供するアクティビティ、周辺地域への「利他」として建築の外観と景観との関係を整理することにする。

3-1 花苑都市について

(1) 花苑都市に至るまで

大屋霊城（図 3-1）は、1890（明治 23）年、福岡県三猪郡久間田村（現・柳川市七ツ家）に生まれた。遠藤新より一つ年下で、ほぼ同世代である。遠藤が卒業した翌年、同じ東京帝国大学を卒業しているが、専門として学んだのは建築学ではなく、農学であった。卒業後明治神宮造営局に勤務したことも遠藤と共通するが、部署は、林苑課である。宝物殿建設区域の設計監督に携わり、伝統的な作庭に実践的に触れながら、新しい造園を模索する経験をしている。なお、遠藤は、大屋が勤務する前年



図 3-1 大屋霊城（1890-1934）

に開催された明治神宮宝物殿の設計競技で三等入選を果たしている。共通点の多い二人だが、計画・設計の主たる対象は異なり、大屋は公園・緑地、遠藤は住宅・建築である。大屋は、大阪府立農学校教師として勤めた期間に『庭園の設計と施工』（1920）を執筆・刊行し、1919（大正8）年から大阪府技師としての立場を基盤に活動した。一方、遠藤は、1922年独立、同年日本を去ったフランク・ロイド・ライト（1867-1959）の代わりに帝国ホテル（1923）を完成させ、ライト同様、フリー・アーキテクトとして生涯どの組織にも属することがなかった。

このような相違点にも関わらず、自らが計画・設計することによって、実現した環境が、そこに生活する人々の人間性に心身の両面で直接関わるところに、自らの仕事の役割や芸術性の意義を求めていたことが共通するのではないかと思う。仕事を通じての社会貢献について、基本的な姿勢が類似しているのである。

大屋の信仰生活は未確認であるが、著作からは、自然への崇拜、感謝の念が読み取れる。また、浄土真宗大谷派養福寺の三男であったこと、長兄の徳城が仏教学者であったことを記しておきたい。「利他」という視点から二人の仕事への姿勢をみると、対象とする他者の幅を広く、利する度合を深く求めたところが共通するように思う。そのために、二人とも、都市・建築など大きなスケールから、そこに活動を展開する人間にとっての（相対的に小さな）スケールまでに視線を向けて、環境が効果的に人々の生活行動に働きかけるように配慮している。例えば、大屋は、他者として子供にも視線を向けて遊び場の設計を手掛ける一方、「都市における児童遊び場の研究」（1928）で公園計画の分野で初めての博士号を取得している。遠藤も、自由学園の設計では、女子中学生のスケールに対応した建築・家具を手掛け、晩年は幼児のために積み木のデザインをしている。一方、設計活動においてアカデミックな取り組みに懐疑的だったところは、大屋と対照的である。また、大屋は、他者として、特に過密な環境に暮らす人々の暮らしをみつめた。その心身の生活を環境の側からより良くしたいという希望と意志が、幅広い活動の大きな動機となり、花苑都市への提案に至ったと考えられる。遠藤の場合、他者として、民族を超えて人類全体に至っており、それが持つべき普遍的な人間性を主題としたように思うが、このことは、機会を改めて考察したい。

大屋が、甲子園花苑都市の計画を「二つの花苑都市建設に就いて³⁻¹⁾」（1926）として雑誌『建築と社会』に発表したのは、36歳の時である。45年という短い人生の中でも、晩年とはいいがたい。しかも、甲子園花苑都市では、これまで関わってきた公園でも住宅地でもない、運動・娯楽を主とする遊覧地の提案に重点を置いている。したがって、甲子園花苑都市は、大屋にとって、一つの挑戦だったのではないかと考えられる。大阪府の技師としての仕事とは別に、幅広い活動を展開した大屋であるが、本章では、まず、大屋が花苑都市に至る道筋を概観することにする。

大屋は、1918年から大阪住吉公園の工事、箕面公園など公園設計の経験を積み、1921（大正10）年、1年間の欧米視察に出て、イギリス、アメリカ、ドイツなどのいわゆる田園都

市を含む諸都市を訪問している。特に、敬愛するエベネザー・ハワード（1850-1928）に直接会い、積極的に意見を交わした。当時、ハワードは、自らの田園都市理論の実践としてレッチワース（1903- ）とウェリン（1919- ）をすでに実現していたのである。大屋は、自らも国際田園都市連盟に入会したという。しかしながら、大屋は、ハワードのみに追随していたのではない。ここでは、言及する余裕がないが、自ら見たレッチワースとウェリンが決して成功しているようには見えないと判断し、その理由についても、自身の考えを持っていた。そして欧米での視察と国内での実務経験を基盤に、自らの都市理論の構築を志したのである。

遠藤の場合は、大学時代、演習の授業で帝国ホテルの見学に行った際、常務取締役兼支配人だった林愛作と出会っている。あこがれの建築家ライトが新館を設計すると聞き、熱心に質問して林の印象に残ったという。卒業論文は“Description on Hotel Design”（ホテル設計の解説）で、その内容から、資料提供やホテル運営など 林からの助力があったことが推察される。師・ライトに倣って住宅の仕事が多く、公共建築としては甲子園ホテルに代表される宿泊施設、自由学園をはじめとする学校建築などを手掛けた。

(2) 花苑都市と庭本位の生活

「進め過群より花園へ」（1923）は、帰国後、大屋が欧米視察の実体験をもとに、自らまとめたものである。「花苑都市」は、この時点まで、「花園」であったが、大屋による説明には本質的な内容の違いはみられないと考えられるため、本稿では、引用文以外は「花苑」に表記を統一する。

まず、「過群」とは、人口密度が過剰な居住状態を指す。大屋は、それによって引き起こされる生活者の心身の負担が社会問題を引き起こす事実を直視した。そして、そのような事態を、居住環境の改革によって解決しようとしたハワードを「宏く一般世人の生活様式を根本的に改造し、火宅のごとき都市の苦境から、全世界に人をすくひ出そうといふ大なる抱負と企画³⁻²⁾」を持った人とし、「議論と実行に一心をささげて倦まない人³⁻³⁾」と敬愛の念を表している。一方で、大屋は、ハワードの前後にも同じ動機から居住環境の改善に取り組んだ欧米のパイオニアに注目し、そこにハワードを位置づける客観性を持っていた。本稿では、それについて詳細に考察することは目的ではないが、いずれにしても、花苑都市の構想は、過密な集住形態に対する欧米の先人たちの問題意識に心から共感しながらも、彼らの考え方を紹介し追随するのではなく、自らの実務経験と現地視察に裏付けられた自らの理念に基づいていたことを述べておきたい。

なお、大屋自身は、過群生活が心身の病に至り社会問題を引き起こす弊害を重く見て、を次のように述べている。

「人が不自然なる生活をすればする程都市が過群の生活を余儀なくされればそれだけ人間の自然を恋ひ慕ふ力は強くなる。この欲望を十分に人が満足しない生活を継続すると人は遂に常軌を逸するいわゆる非常識の人間となって正鵠な判断を欠くことになるのだ³⁻⁴⁾。」

ここには、大屋が過密な生活の弊害を根本的に解決するために、自然を取り込むことが

不可欠であると考えていることが読み取れる。

また、大屋は、日本の都市を過群にした過程について以下のように描写している。

「寺を追ひ出して倉庫を作り、川を埋めて電車を引き、嘗て寸地をも残すといふことをなさない。市民の耳を楽しましむべき音楽目を楽しましむべき花苑精神の慰安を興ふべき宗教、疲れを回復すべき木陰、かくの如き尊き施設について嘗て老へたことがない³⁻⁵⁾。」このことから、大屋が、ただ自然を取り込むだけで都市問題を解決したことになるのではないかと考えていることが分かる。本来、都市には、心を癒すために宗教が、疲れを癒すために木陰が必要だというのである。また、耳を楽しませるには音楽が、同様に目を楽しませるには花苑都市の美が必要であるというのである。つまり、花苑都市の美は、心身を癒し楽しませる文化とともにあるのだ。それを前提に、人として本来の活動ができるという意味で人が住むべき場所は、「緑樹もあり、草原もあり、諄々なる水もあってこそ³⁻⁶⁾」と述べ、必要条件として豊かな自然を主張するのである。

これらのことから、大屋の花苑都市とは、真に心身を癒し楽しませるような文化が備わった自然豊かな都市と捉えることができるだろう。したがって、大屋の理想は、「都市の田園化、田園の都市化³⁻⁷⁾」にある。また、そうして形成されていくのが花苑都市だというのである。その実践を通じて、「日本の全国土をしてこの楽しい境地に、否世界の全域を挙げてこの楽境としたい。それも遠からぬ将来であろう³⁻⁸⁾。」と花苑都市への期待と希望とを語っている。

以上をまとめると、大屋の花苑都市は、まず、過剰な集密化という「過群」を解決するために、それを先に経験してその対策・改善に着手した欧米諸国の手法を取り込んでいること、真に心身を癒し楽しませるような文化と自然美を備えていることが特徴であるといえる。大屋は、そのような花苑都市を、まず日本、さらに世界に広げていこうという夢を持っていたのだ。

大屋は、欧米の田園都市を、ハワードのガーデンシティ以外に、ガーデンサブurbとガーデンヴィレッジ³⁻⁹⁾に大別してその特徴を整理している。そして、現状の日本は、本来のそれぞれの意味を知らずに田園都市という名称が流行しているだけだと批判している。一方、大屋の花苑都市は、それら3者の良いところを総括し併せ持つという。

特に、日本の田園都市と呼ばれているものが住宅本位であるのに対し、花苑都市は、自然本位、かつ庭本位であるところに決定的な違いがあるという。そして、そのことこそ、花苑都市において実現する生活の真髄であるという。そのような生活の癒しと楽しみについて、ドイツのガルテンコロニーエン³⁻¹⁰⁾の例を引きながら大屋は以下のように語っている。

「花園生活の楽しみは、その土に親しむにある。譬え一束の野菜でも自分で培ったものは甘い、又新鮮であるがために滋養の価値も大である。いかに薄弱な身体を持ち主でも、田園に入って土に親しむときは年ならずして丈夫な骨格を作り上げることができる。自然！嗚呼！！なんと自然は正直であらう。偽りのない生活、限りなき真の人生の楽しみは悉くこの田園にある³⁻¹¹⁾。」

花苑都市において、市民は、みな土に親しんで自ら野菜や果物を作り、味わい、健康になる。それこそが、偽りのない、限りない人生の楽しみのある生活だという。それは、都市が持つ自然美をはじめ、心身の癒しと楽しみをもたらす文化と密接しながら、市民ひとりひとりが持つ楽しみとあってよいだろう。そして、花苑都市の建設によって、そのような生活を、日本から世界に広げることが、大屋の「利他」の方向性であるといつてよいと思う。

3-2 甲子園花苑都市について

1926（昭和元）年、大屋は、『建築と社会』に「二つの花苑都市建築に就いて（上）」を發表したときに、自ら「花園」を、「花苑」に改めた。「花園」より「花苑」のほうが、意図する意味を伝え、一般性がより高い印象を与えると判断したためであるという。以下に、大屋が述べる変更理由を引用する。

「茲に「花苑都市」と云ふ言葉を選んだのは田園都市と云えば社会政策的の意味の加はった所謂ハワード氏のガーデンシティー風に考えられる虞があるので田園と云ふ字を用いずまた遊覧都市と云へば例へば奈良、京都の如き名所の遊覧を以て人を集めこれによって建っている都会の如き感じを興へあまり面白くないのでよした譯である。又花園都市と云つてもよからうかと思ふが花園と書くと花園（ハナソノ）とも讀まれなんだか固有名詞でもあるような感じもあるのでこの苑の字を借りてきたのである³⁻¹²⁾」

甲子園花苑都市は、これまでの大屋の花苑都市と異なり新たに遊覧地の計画を含む。それは、過密な居住環境の改善による社会改革を目指すハワードの田園都市とも、奈良・京都に代表されるような名所・旧跡に依る観光都市とも異なるので、花苑都市と呼びたいのである。しかしながら「花園」が固有名詞であるかのような印象を与えるので避けたというのは、例えば京都市内の地名・花園を連想するためであろうか。もし、「甲子園花園都市」とすると「園」が重なることも目についたのかも知れない。なお、「苑」は「園」と違って、芸術や学問が集まるところという意味があり、もともと大屋が市民に必要と考えていた心身を癒すための都市文化の存在をより明確に表現できると考えたからかも知れない。

当時、阪神だけでなく、阪急電気鉄道や大阪電軌鉄道（現近畿日本鉄道）が、郊外に総合的な事業を行いながら、新たな開発地計画に着手していた。前述のように、大屋自身「川を埋めて電車を引く」ことによってこれまで存在した自然を失うことは、「寺を追い出して倉庫を作る」と同様に、心身の癒しと楽しみのための場所を喪失すると捉え、批判的立場をとっていた。したがって、大屋の甲子園花苑都市は、これまで批判的に見ていた電鉄側の計画に、自らの花苑都市の自然本位、庭本位の特質を盛り込もうとするという意味で挑戦的なものだったと捉えられる。花苑都市全体を時々遊覧都市と称しているところからも、新たな意気込みが感じられる。もちろん、遊覧地は住宅地ではないので、市民が各戸で土に親しむような生活を提案の中心に据えるのは難しいと思う。一方、遊覧・娯楽の施設計画に、自然美と人々の心身の癒しと楽しみを盛り込むことは十分可能性があると思う。この観点から、遊覧地に立つホテルについて以下に考察する。

(1) ホテルがもたらすアクティビティと外観

大屋霊城は、「二つの花苑都市建設に就いて」(1926)において、甲子園花苑都市については、計画図で概略を示している。そして、阪神鉄道線以南(海側)を遊覧地、以北(山側)を住居地域と称している。大屋の計画図に、遊覧地、住居地の位置と、海川、主要道路・鉄道を加えたものを図3-2に示す。遊覧地には、甲子園球場をはじめとする運動施設、海水浴をはじめとする娯楽のための施設がある。運動施設は、甲子園駅の南側にまとめ、ホテルは、遊覧地の南端の海水浴場近くに配置している。そして、ホテルについて、以下のようになっている。

「海浜を一つの理想的海水浴場とし、合わせて娯楽中心地としての施設を兼ねしめ³⁻¹³⁾」
「海浜施設の呼びものとしては、中央に一大ホテルを新設し階下はこれをカフェーとして設備し2階以上をホテル兼レストラン(ママ)として利用しとくに摩天閣風の高塔を建設して³⁻¹⁴⁾」



図3-2 大屋霊城による甲子園花苑都市(1926)の構成

まず、大屋のホテルは、海水浴をはじめとした娯楽に必要な海浜の施設群の中心的存在であることが分かる。海浜施設群の中でも特に「呼びもの」であるから、遊覧地を特徴づけ、ホテルに滞在する人々はもちろん、訪れる人々の関心を強く惹き付け、憧れの気持ちを抱くような施設と捉えられる。

具体的には、1階はカフェ、2階以上にはレストランおよびホテル（宿泊部分）となっている。人々がホテルでの飲食や宿泊を通じて、実際に甲子園の海辺にやってきたことを強く実感できることが、心身の癒しと楽しさに通じていくのだろう。また、外観については、「一大ホテル」と呼ぶにふさわしい規模を持ち、「摩天閣風の高塔」であるから、高層と捉えられる。したがって、ホテルからの眺望や、ランドマークとしての役割も期待される。ただし、大屋の構想にあったのは、当時のシカゴやニューヨークに林立していたスカイスクレーパーではない。ホテルの外観については、以下のように続けている。

「海浜であるから随分烈風の見舞うことも多いので高層建築は頗る困難な地点にあるからその點は単に裝飾の高塔に止めなるべく経費を節約するが得策であろう。今参考として示した和蘭ハーグ海浜の海水浴場に於ける大ホテルの写真を掲げておく³⁻¹⁵⁾」

大屋が示す2枚の写真のひとつは、デン・ハーグの海浜区域スヘヴェニンゲンにあったパレスホテルの絵葉書（図3-3）である。ホテルは概ね5層で、砂浜より少し小高くなった場所にある。大屋自身、4層以上を高層としていたこととも矛盾しない。

左右対称のパレスホテルの前面両側には、それぞれ空に突き出た塔がスカイラインに変化をつけている。2本の塔は、細い柱で支えられており、柱の間からも空が透けて見え、裝飾として付加されたと思われる。



図3-3 スヘヴェニンゲンのパレスホテル(オランダ、デン・ハーグ)

ホテルの前面に海まで続く砂浜を、紳士淑女や家族連れなどが散策しており、暖かい季節に撮った写真であろう。前方には籠に編んだ繭（図3-4 とほぼ同じのものと考えられる）



図3-4 スヘヴェニンゲンのパレスホテル(オランダ、デン・ハーグ)

のような日除けの中に座ったり、その間を漫ろ歩く姿、後方には三角形のテント状の小さな屋根が連なるおそらくは脱衣場に出入りする姿が見える。これらの水平の広がりがあるパレスホテルの層に連続し、海辺の散策、日光浴や海水浴と、ホテルでの食事や休息などのアクティビティの繋がりが想像される。

したがって、大屋のホテルもまた、浜辺で日光浴や海水浴を行う人々の近くに位置することを意図としているのであろう。浜辺の人々はホテルを見上げ、ホテルの窓からは浜辺の人々と共に前方に広がる海が見える関係を構想していたと考えられる。

また、大屋がホテルの参考資料として示したもう一つの写真(図3-5)は、ホテルと同様、デン・ハーグのスヘヴェニンゲンの絵葉書で、水平線に向かって栈橋が伸びている。



図3-5 スヘヴェニンゲンの栈橋(オランダ、デン・ハーグ)

大屋の文章による説明はないが、海辺における別のアクティビティを示している。つまり、明るい光と風の中で、海辺の風景を楽しむことが出来るような場所が、ホテルのそば近くにあるということだと思ふ。大屋は、自らの計画図でも、ホテルのそばに栈橋を描いている（図3-6）。さらに計画図には、栈橋とホテルの間に、栈橋と交差して「海岸遊歩道路」と名付けた遊歩道が、海岸線に沿って続いており、海辺の景観をゆっくり楽しみながらの散策を可能にする距離を獲得していると思ふ。

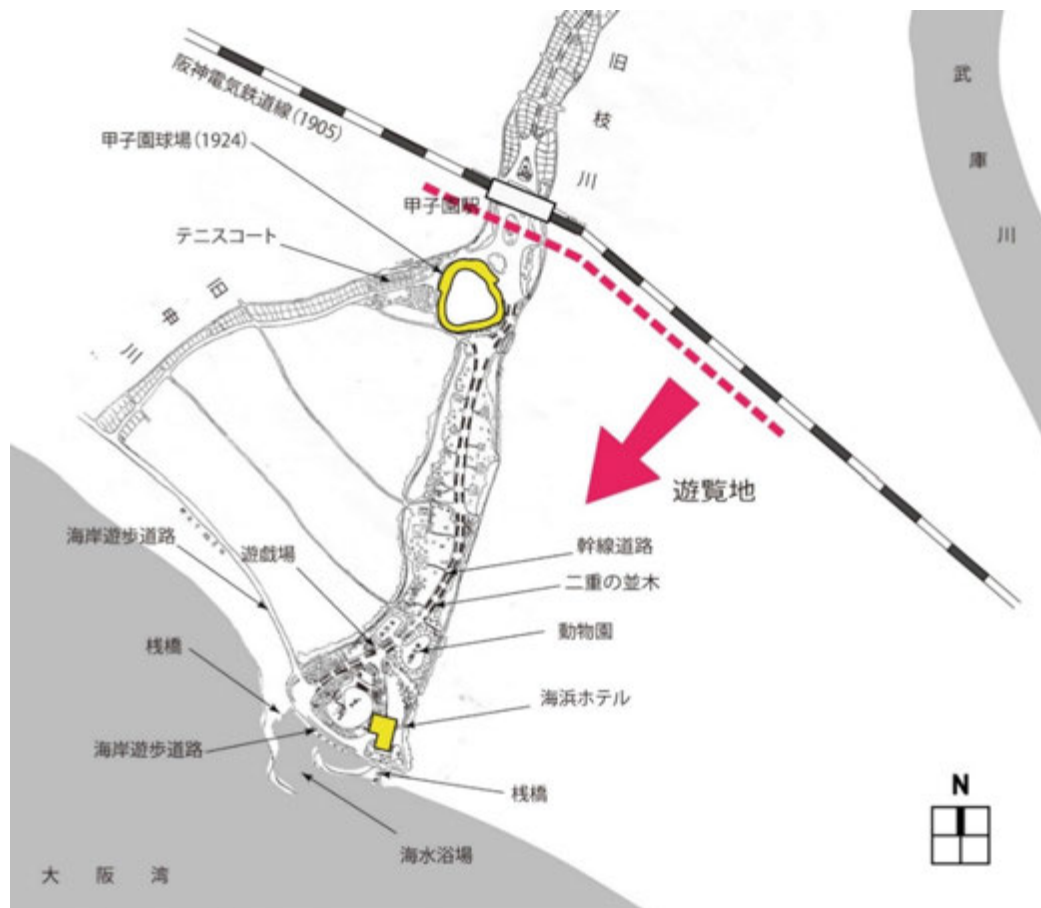


図3-6 甲子園花苑都市の遊覧地

ただし、大屋は、海水浴場の施設・設備まで欧米を参照する必要はないという。具体的には、浜寺海水浴場をモデルとして、必要な施設の種類、軒数、規模を配置図（図3-7）を用いて説明している。そして、「（浜寺を）参考としてこの甲子園海水浴場にありても設計せば大なる不都合なきものと考えゆ³⁻¹⁶⁾」と述べている。浜寺海水浴場は、現在の大阪府堺市西区に位置し、浜寺公園内に戦前まであった関西最古の海水浴場である。大屋は、大阪府技師としてその設計に携わっており、実務経験から得た自信が感じられる。

また、大屋は、飲食について、娯楽施設を成功させるには欠かせないと考えており、次のように述べている。

「我国人ことに關西人の娯樂は多くは飲食にあるを以ていかなる娯樂中心地の設計にありてもこれを十分に考慮せざるべからず。(中略)この方面の考慮で不十分ならざれば必ず不都合を惹き起こすものなり³⁻¹⁷⁾。」

このことから、大屋が、海水浴場を含む娯樂施設群を、日本人、特に關西人を対象に計画していることが分かる。娯樂施設群のモデルとして、当時、關西で最もにぎわいのあつた新世界取り上げている理由でもあろう。新世界における建築について、その用途別に、件数および面積と新世界全体における割合、1軒当たりの坪数などをあげている。そして、飲食系施設が、件数、面積ともに、劇場・映画館など本来娯樂とされる施設を超えて第1位であることに注意を促している。つまり、新世界では、飲食系施設と娯樂系施設の並存が、人々のアクティビティに相乗的な楽しさをもたらし、人々をよびこむ。大屋は、そこに着目し、娯樂に対する飲食の役割が重大であると捉えたのであろう。前述の浜寺海水浴場では、そのための施設として、事務所を中央にして両側に男女の脱衣場、休憩場などが海岸線と並行に配置されている。その両側と背後に飲食店を隣接させている(図3-7)。娯樂としての海水浴と飲食のアクティビティの連続をヒューマンスケールでも意図していることが読み取れ、注目される。

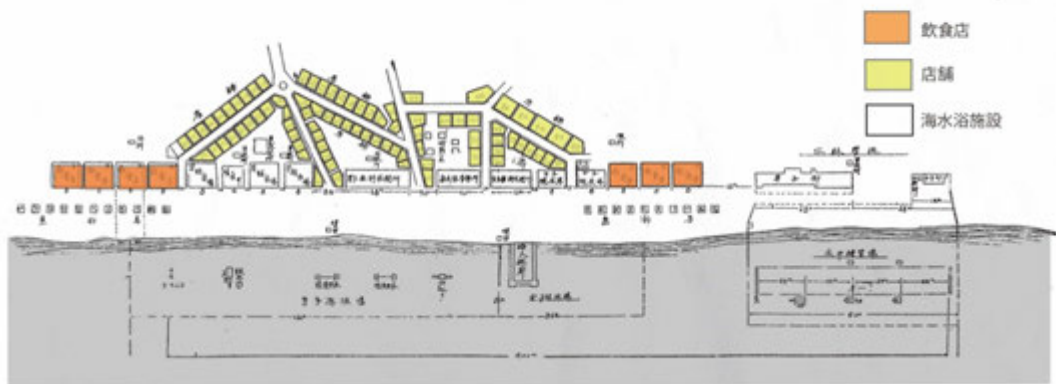


図3-7 濱寺海水浴施設配置図

さて、甲子園の遊覧地における海浜の娯樂施設群は、日本人、特に關西人を対象にしているのであれば、大屋の断りが無い以上、その「よびもの」であるホテルもまた、同様の対象、つまり日本人、特に關西人であろう。そして、同様に楽しさの相乗効果をねらい、飲食と海水浴などの娯樂のアクティビティの連鎖に、ホテル本来の機能である宿泊・滞在のアクティビティを繋いだと考えられる。例えば、1階のカフェは、宿泊客はもちろんだが、海水浴や日光浴に訪れた人々もよびこみ、同じ空間で飲食や会話を楽しむことができるだろう。さらに、宿泊客は、ホテル近くの栈橋や遊歩道での散歩を楽しみ、途中で別の娯樂施設や飲食店に立ち寄るなどが、アクティビティの連鎖として想像される。

しかしながら、図3-7からも推察されるように、これらのアクティビティは、新世界にみられるような高密度の施設配置において展開するのではない。大屋は次のように述べている。

「四周の状況と地形の関係より、これを新世界的に一箇所に密集せしめることを辞め（中略）適当に分散し以て風致を添え且はあまりに俗悪に流るるを防止する方法を探れり³⁻¹⁸。」

大屋は、娯楽施設群に適切な品位を与え、それを維持することを遊覧地計画の一環として重視していたことがわかる。さらに、品位の構成要素として、具体的に「自然美と清楚と平和と閑静³⁻¹⁹」をあげている。大都市の娯楽地にはみられない対照的な特徴ではないかと思う。つまり、適切な品位の実現のために、「四周の状況と地形の関係」を活かし、娯楽施設群が密集するのを避けて分散させるというのである。大屋の計画図は白地図の上に描かれており、「四周の状況と地形の関係」をどのように読み取ったかは判断が難しい。いずれにしても、それは、花苑都市が、住宅の過密を避け、自然本位、庭本位とすることと共通している。それらの自然美の中に娯楽施設は分散し、新世界の喧騒や猥雑を避けるための条件ともなるのであろう。そこには、土に親しむ生活がもたらすのと同質の前述の「偽りのない喜び」が想定されていると推察される。同時に、やはりそれらと同質の「清楚と閑静」をもった雰囲気があるのだろう。それによって、人々には、「平和」な気分がもたらされるであろう。

遊覧地におけるこのような施設群の分散について、その中心的存在であるホテルとの関係を考察したい。

(2) 施設群の分散とホテル

遊覧地において、甲子園球場などの運動施設は甲子園駅の南側にまとめ、その他の娯楽施設は、幹線道路沿いに海岸まで分散配置している（図 3-6）。大屋は、甲子園球場からみた海側の景観について次のように述べている。

「これ（ホテル）がベースボールグラウンドの後方に出ればすでに遠く前方の視界に顕はるる如く遠路植樹等の配置を加減して一つの永きヴェスタラインを設定する³⁻²⁰。」

甲子園球場からホテルまでは、直線距離で約 2km あるが、その間をつなぐ幹線道路の向こうに、ホテルを見通し眺めることができるというのである。さらにホテルの背景に海の水平線もみることができるだろう。ホテルに向かう途中には、娯楽施設群が緑の中に分散しており、ひととき高く海辺に立つホテルはまさにランドマークである。

大屋は甲子園駅から海浜の娯楽施設群への移動の方法と、幹線道路沿いの景観の特徴について、次のように語っている。

「電車線に近く運動施設を集合建設しこれを一本の大遊覧道路を持って連結しバス（乗合自動車）をこの上に走らしめて両者の連絡を保ち兼ねて沿道を公園的に施設してバス上より四周の風物を眺めながら海浜に至らしめんとする考えである。

この設計にあつては道路の幅員を特に広くし約十間を保ち且なるべく直線又は折線を避けて曲線を選ぶの趣旨より円の如きカーブを選定せり³⁻²¹。」

この大屋の説明と図 3-6 から、ホテルまでの空間体験を次のようにまとめることができるだろう。甲子園駅を出ると、南側にロータリーを介して甲子園球場がある。さらに、旧申川側にその他の運動施設として大小のテニスコートをとっている。人々の中には、スポ

ーツを楽しむ計画をたてる者もいるだろう。そして海岸行きのバスに乗り込む。旧枝川側には、海辺に向かって幹線道路が通っている。幹線道路の幅員は広く、約18mである。それは、緩やかなカーブを描きながら甲子園球場と海岸のホテルとを繋いでいる。両側には、二重に植えられた街路樹を通して、公園のような広々とした緑の中に娯楽施設が散在している。人々は、街の中にはないそれらの風景をバスの窓から楽しみながら、思い思いに途中下車したり、ホテルへ、さらには海岸へとむかうのだ。

ところで、当時、阪神電鉄は、すでに路面電車の敷設を推進していた。しかしながら、大屋は、「自然美と清楚と平和と閑静とを望むべき場所において騒音けたたましき電車を通ずるときは最も忌むべきことなれば将来は会社においても必ず改むる考えならんと思ふ³⁻²²⁾。」とのべている。電鉄会社に対して電車の代わりにバスを推奨するということは、それなりに思い切った提案と捉えられるが、大屋にとっては品位の一端を支える閑静を得るために欠かせないことの一つなのであろう。

さらに、バスが走る道路のカーブの形状と役割について、以下のようにのべている。

「道路の曲線なると直線の接合なる形式に依るとは人の感じを軟らぐる上に於いて大なる差異あるものなれば私は特にこのカーブの路線を遊覧地の中央幹線道路として選びたいのである。しかしあまりにカーブのみをもちゆる時は時に却って不快の気を起こさしめ倦怠と迂回の感あり。半径小なる円弧を多く接合したる場合特にこの感を深くするものである³⁻²³⁾。」

甲子園球場とホテルを繋ぐ道路は、大きな半径のカーブを描いており、上記の説明に対応している(図3-6)。緩やかなカーブは、「人の感じを軟らぐる」ことを意図して大屋が選んだカーブであり、直線や小さな半径の連続を選ばなかった理由であるという。大屋は、このカーブと前述の風景との相乗効果によって、海辺に向かう人々が和らいだ「平和」な気分を得るための効果を期待していると捉えられる。

幹線道路は、カーブを描きながら、かつて川であった曲線状の土地と同様の方向に伸び、すでにあった甲子園駅や甲子園球場と新しい娯楽施設群を結ぶという意味では、既存環境との関係を活かしているといえるだろう。ただし、大屋の計画図は白地図の上に廃川敷のみが記されていることが特徴である。したがって、大屋の計画図から、それ以上、周辺地域との関係を読みとることは難しい。

遊覧地におけるホテルについて、以下にまとめておく。

甲子園花苑都市の遊覧地は、日本人、特に関西人を対象とする。遊覧地の品格は、「自然美、清楚、平和、閑静」の感じられるような雰囲気によって構成される。そのために、花苑都市の居住地と同様に密集を避け、海岸や樹木など自然の中に運動、娯楽のための施設が分散している。同時に、それらによって、スポーツ、散歩、海水浴、飲食などのアクティビティが連続し、相乗的な癒しと楽しさの効果を生むように、ヒューマンスケールでの配慮をした配置となっている。特に、一大ホテルとして、遊覧地の呼び物となるホテルは、内外でそれらのアクティビティとつながる。それによって、宿泊・滞在もまた、ア

クティヴィティの相乗的な連鎖に組み込まれ、癒しと楽しさを増す。ホテルは、外観および立地としてはオランダのデン・ハーグのパレスホテルをモデルにしているが、海水浴や娯楽のための施設の種類・規模・数などについては、日本国内、特に関西の実例を参照している。また、ヴィスタのきいた緩やかなカーブの幹線道路から見える景観は、ホテルを、海を背景に遊覧地のランドマークまたはシンボルとして印象付けている。

4. 2つのホテルの比較

大屋霊城による甲子園花苑都市におけるホテルと、林愛作と遠藤新による甲子園ホテルについて、まず、ホテルを比較し、次に、ホテルと周辺環境との関係について比較することにする。林と遠藤には、それぞれ経営・運営と設計という役割分担があり、予算、利潤、合理性などをめぐって、通常は対立関係がありがちではないかと思う。しかしながら、電鉄へのプレゼンテーションから竣工まで約1年7カ月という短さにもかかわらず実現した建築空間の完成度の高さには、例えば職人の手による細かな彫刻を考え併せても、驚くものがある。林と遠藤の間に考え方の違いがあれば議論に時間を取られるため、不可能ではなかったかと思う。したがって、林と遠藤は、概ね同じ考えであると措定し本稿を進めることにする⁴⁻¹⁾。

本研究の目的は、2つのホテルとその背景において、「利他」の在り方に質的な違いがあるかどうかを知ることにある。そのために、まず、「他者」として誰が想定され、彼らを「利する」ためにどのようなアクティヴィティを準備し、結果としてどのように「他者を利する」のかを比較の視点としたい。

ところで、前稿で仮説とし、多様な「利他」の表れを考察した「豊穰の水」の物語は、8割がた当時の姿が遺るとされる実際の建築（現・甲子園会館）にみられる装飾と建築との関係から読み取ったものである。一方、大屋の遊覧地やホテルについては、計画図は発表されているが、実現はしなかった。そこで、比較が恣意的になるのを避け、まず、基本的な「利他」の違いを得るために、本章では、「豊穰の水」の物語は、本章の比較のための素材・資料には含めない。そうではなく、第3章までの考察に基づき、大屋、林・遠藤がそれぞれ残した言説を、計画図・図面・リーフレットなどと照合し、必要に応じて阪神電鉄関係者の言説、新聞記事などの関係資料を参照することにする。

4-1 ホテルについて

(1) 対象とする滞在客とそのニーズ

花苑都市におけるホテルは、遊覧地を訪れる日本人、特に関西人を宿泊客の対象とする。それは、大正、昭和の都市文化を担った「大衆」とすると同時に、関西に生活する「関西人」である。そこには、関西と関東の文化の違いが意識されていると考えられる。たとえば首都は東京にあっても、文化度は関西のほうが高いという意識が、特に昭和の初期まで関

西人の誇りでもあったことと関連するのではないかと思う。それに対して、甲子園ホテルは、「西の迎賓館」という名称が示すように、国内外の賓客に対応し、各分野を牽引し、第一線で活躍する人々を対象とする。開業後は高松宮夫妻などの皇族、藤田嗣治、島崎藤村など芸術家や文筆家、アラブの国王夫妻、旧満州国関係者、アメリカの野球・テニス選手などが滞在した。日本国内にとどまらず世界から訪れる「貴賓」、各界の「著名人」である。

つまり、2つのホテルが対象とする宿泊客は、基本的に異なっていたといえるだろう。しかしながら、「大衆」と「貴賓」とを対照させ、それだけで比較するのは不十分であると思う。前章で見たように、大屋は、ホテルとそれが立地する遊覧地に、「自然美、清楚、平和、閑静」による品格を与えようとした。つまり、いわゆる「大衆」という言葉から連想する都市の「さかり場」的な安楽や猥雑な賑わいを差し引き、「自然美」に満ち、「閑静」な中に「平和」な雰囲気を楽しめ、心身を回復させるものだったと考えられる。さらに、それが「清楚」でもあるのは、労働者の過密な集住生活の改善を目指して建設されたがゆえに、健全な生活を求め、豪華や贅沢の表面的な模倣が回避された欧米の田園都市の持つ雰囲気に、大屋もまた共感を寄せていたからではないかと思う。それは阪神間にこれまで無いタイプの遊覧地であったと考えられる。

一方、甲子園ホテルについての「西の迎賓館」という構想は、前述の設楽貞雄の「何でも日本一の文化村」を下敷きに遊覧地計画を進めてきた阪神電鉄には、いうまでもなく魅力的だったと考えられる。対する「東の迎賓館」は、もちろんライトによる帝国ホテルであろう。林が阪神電鉄からの打診を受けたと考えられる1927（大正16）年は、ライト館の完成から4年、従って、開業の年の関東大震災にも倒壊せず、各国の大使館や著名な企業に臨時のオフィスを提供した記憶もまだ褪せてはいなかった時期だと思う。何よりも世界の要人・貴賓をもてなす場であるばかりでなく、これまでにない外観と規模であったから、迎賓館として存在感を放つ理由には事欠かなかったと想像される。

では、甲子園ホテルは、一般の日本人の日常感覚に歩み寄らないホテルだったのかといえば、必ずしもそうではない。林愛作が見込んでいた日本人宿泊客の割合は、6~7割とされるが、大都市に位置しない限り、外国人で部屋が埋まることはあり得ないと判断してのことだった。そこで、日本人にもホテルでの滞在を楽しんでもらうために、特に女性や子供などの家族連れを重要な対象としたのである。林の主張⁴⁻²⁾を順に追ってみる。

当時の日本のホテルは、すべて欧米の起居様式による洋室であった。海外の有名ホテルの宿泊経験が豊富な林は、日本のホテルのモデルとして、プライバシーの面では優れているが、宿泊客を、訪問者（ヴィジター）と呼び客（ゲスト）とは呼ばないという基本的な認識の違いから、サービスが悪い点を批判的にみていた。では、ホテルを選択しない日本人は、すべて、伝統的な旅館、宿屋を選ぶのかというと、決してそれを喜んで求めてはいないという。例えば、日本の旅館・宿屋は、サービスは世界一だが、部屋の間仕切りや浴室にはプライバシーの欠如があり、それだけでも女性にくつろぎにくい。林の言及は無いが、当時はまだ和装と洋装が半々で畳の部屋での身づくろいも必要であったと考えられる。

林は、甲子園ホテルのために日本で初めて和室と洋室のスイートを考察した。そして、洋室には寝椅子（カウチ）を置くことで、外国人にも対応し、和室には布団の数で収容人数に柔軟に対応できる利点を指摘している。

結果として、甲子園ホテルは、日本の起居様式に応えることによって、日本の各界で指導的立場にある人々もまた、家族で旅行や滞在を楽しめるようなホテルになった。言い方を換えるなら、林は、日本国内の風光明媚な地域に立つホテルに、家族での滞在という新たなニーズを生みだそうとしたといえる。

(2) ホテル内のアクティビティ

花苑都市のホテルでは、滞在客は、宿泊、海水浴などの娯楽、飲食を楽しむ。1階にカフェ、2階以上にレストランと宿泊施設がある。ホテル内外のアクティビティは、飲食と繋がることによって、滞在の楽しさに相乗効果が与えられる。特に関西人が、娯楽と結びついた飲食を大切にするので、それに応えるような施設が、遊覧地やそれを代表するホテルの成功には欠かせないと考えていたのである。

甲子園ホテルでは、ホテル内での滞在そのものを楽しむ。それは、質の高いサービスとホテルと庭における特徴ある空間の実感が基盤となる。南側に広がる池では舟遊びができる。前掲の写真（図 2-2）には、西翼大宴会場の前の池の畔に船がつけられているのが見える。1階に食堂、大宴会場など、飲食を楽しむための空間を配する。3階に屋上庭園があり、宿泊する部屋の窓の位置とは別に、ここに出て来れば、誰もが南側に白砂青松の海辺、北側に六甲山の山並みの眺望が楽しめる（図 4-1）。客室として、スイートの半分を洋室と和



図 4-1 甲子園ホテル3階の屋上テラスとそこから南北に得られる眺望

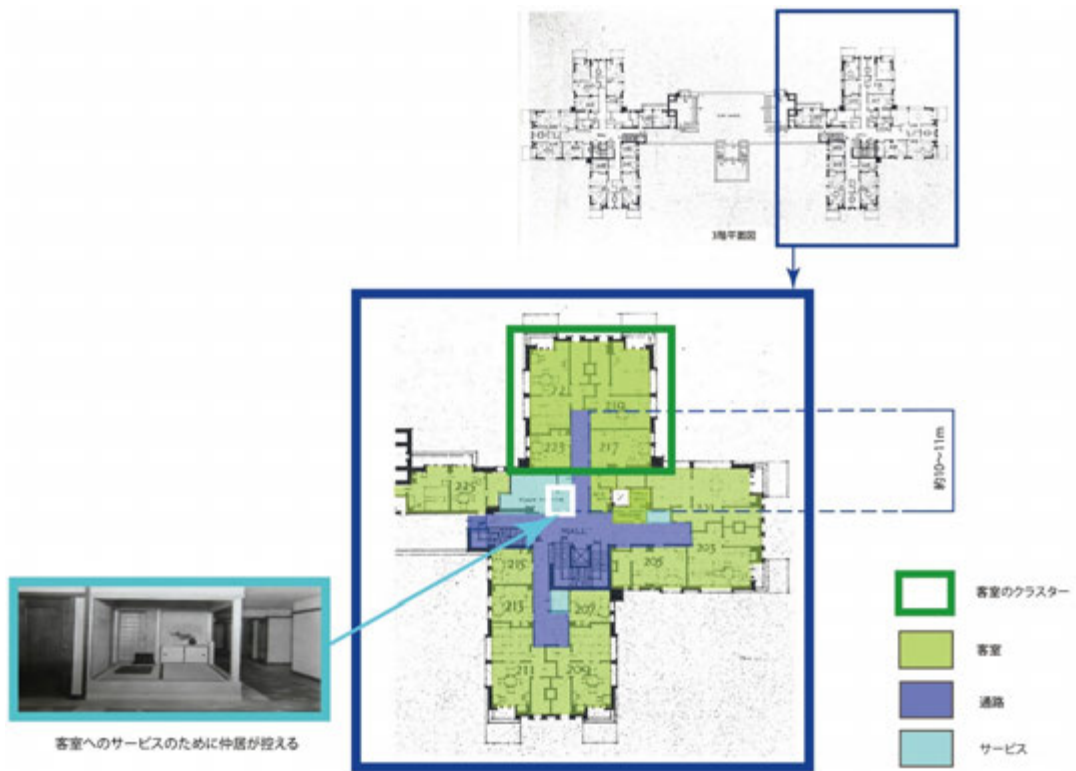


図 4-2 甲子園ホテルの客室のクラスターと廊下(西翼部分)

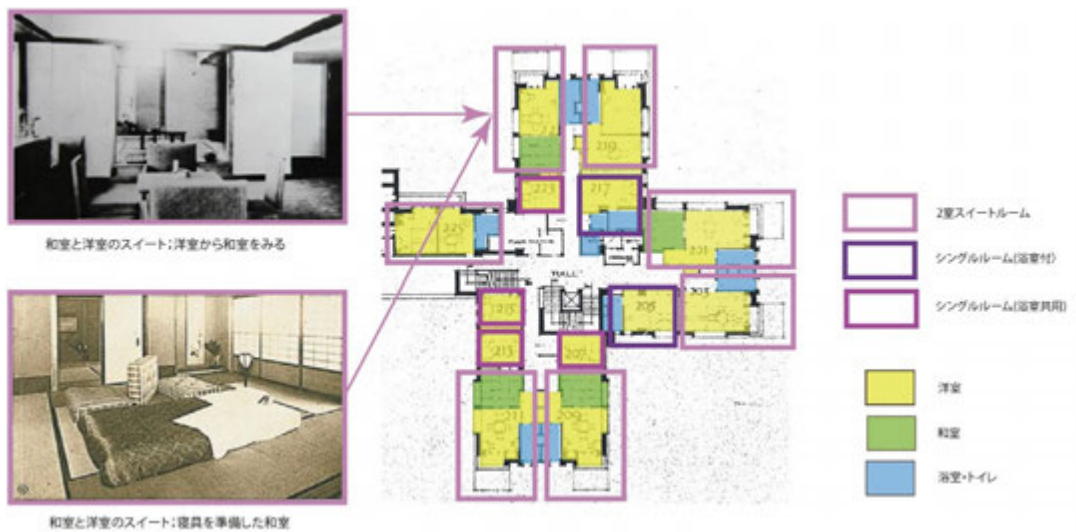


図 4-3 甲子園ホテルにおける客室の種類と配置(西翼部分)

室の組み合わせとし、浴室付きとしているため、日本人家族にとっては、プライバシーと生活様式の両面で都合がよい。単調な長廊下を採用しない工夫により、廊下の長さは10～11m程度となっている（図4-2）。それは、通常の住宅よりも短いほどだと遠藤自身が紹介しており、家にいるような温かみや親しみが演出されているということであろう。この短い廊下は、和室と洋室のスイートと洋室2室のスイート、浴室を共同とした洋室のシングル2室とをつないで一つのクラスターを形成している（図4-3）。

また、宿泊や食事の料金は、関西の高級ホテルの中では抑え気味だったようである。開業の4年後の1934年、例えば、スイートに1人1泊するのにかかる料金は、1位が奈良ホテル、2位が神戸のオリエンタルホテル、3位が京都の都ホテル、4位が阪神間にたつ甲子園ホテルで、それに帝国ホテルが並ぶ⁴⁻³。食事に関しては、1位に都ホテル、京都ホテル、オリエンタルホテル、トーアホテルなどが並ぶ。2位が、甲子園ホテル、奈良ホテル、大阪ホテルで、ここに帝国ホテルも並ぶ。

さらに、1泊分の宿泊費については、和室と洋室のスイートが一人につき10円であるが、シングルの洋室は半額の5円である。宿泊客は、必ずしも富裕層に限定せず、階層の幅を拡大しようという意図がうかがえる。

林は、大切なのは宿泊客の「目と耳と胃と財布⁴⁻⁴」と述べているが、施設とサービスと食事の高い水準と適切な価格設定のバランスを実現させていたといえるのではないだろうか。

また、3つのクラスターの中央には、各室のサービスに対応するためにナースステーションに看護師が控えているように仲居（当時は、女中とよんでいる）が控えている（図4-2）。以上のことから、甲子園ホテルは、建築に限定してみても、生活様式、プライバシー、サービス、眺望などについて、きめ細かで多様な配慮があるといえる。それによって日本人宿泊客は、甲子園ホテルにおいて、くつろぎある滞在が可能であり、立地にふさわしい眺望とアクティビティを楽しむことができるであろう。

花苑都市のホテルが、アクティビティとして、飲食と宿泊のための施設の配置に重点を置いているのに比べると、より独自性と具体性がある。もちろんそれは、花苑都市のホテルが、都市計画の一部としての計画案に留まったことにもよると思う。花苑都市のホテルは、遊覧地でのアクティビティと繋がるように意図されているので、次に周辺との関係を見ていきたい。

(3) ホテル周辺のアクティビティ

花苑都市のホテルでは、阪神甲子園駅からバスに乗車する。緩やかなカーブを描く幹線道路を、緑の中の施設群を眺めながら（既に阪神電鉄が舗設していた路面電車よりも）静かなバスでホテルに向かううちに、人々の心は和らぐ。ホテルに着くと、ホテルの敷地内に限定されず、遊覧地での滞在中を楽しむ。そのための遊覧地内でのアクティビティとして、娯楽・飲食のための施設の規模・軒数については十分に準備する。それらと、海水浴、栈橋や浜辺の散策などとの望ましい関係を実現する施設配置のために、堺市の浜寺海水浴場、大阪市の新世界における施設の規模・数・配置などを参照する。つまり実例の参照は、

関西の賑わいある成功例に求める一方、遊覧地全体が品格を保てるように、飲食・娯楽施設は、過密を避け、緑の中に分散して配置する（図 3-6）。

一方、甲子園ホテルの場合、リーフレットの裏表紙（図 4-4）には、「隔絶した美しい場所にある庭園に立地しているけれども、バスでも電車でも自動車でも、大阪からも神戸からもたった 25 分の地点にあり、海辺のリゾート、オペラ、温泉、競馬場は、すべて近距離にある」と、大都市の喧騒から離れた静けさと美しさと同時に、大都市に近い利便性を兼ね備えた立地を謳っている。英文ではあるが、交通手段には、バス、電車、自動車と、すべての可能性を挙げている。甲子園ホテルは、決して安価なホテルではなかったが、このことから、滞在または訪問するのが必ずしも賓客か富裕層のみ、というわけではないことが分かる。



図 4-4 甲子園ホテル開業当時のリーフレットの裏表紙

表紙に描かれた地図をみると、海辺のリゾートとして、甲子園球場、甲子園海水浴場、鳴尾競馬場、鳴尾ゴルフリンクなどが描かれている（図 4-5）。また、オペラは、宝塚歌劇場、温泉は、有馬温泉を指すことが分かる。さらに、ゴルフ場については、六甲山中に、宝塚ゴルフ場と、六甲ゴルフ場があり、帝国ホテル勤務時代には、海外からの宿泊客はもちろん、日本人での普及を目指して東京ゴルフクラブ設立に尽力した林の変わらない関心の方向性が見て取れる。また、ホテルから少し足を延ばした小旅行のための観光地として、神戸、大阪、奈良、京都を、それぞれ、湊川神社、大阪城、大仏、五重の塔など、日本の伝統を象徴する図像で示している。海外の滞在客に日本の伝統文化を知ってもらいたいという、やはり帝国ホテル時代と変わらない林の思いが続いていることが分かる。

花苑都市のホテルは、立地する遊覧地との関係において、主として関西人が大切にする飲食と、娯楽および海水浴と海辺の散策などのアクティビティのつながりの中でとらえられている。一方、甲子園ホテルは、庭園における舟遊び、遊覧地でのスポーツや海辺の

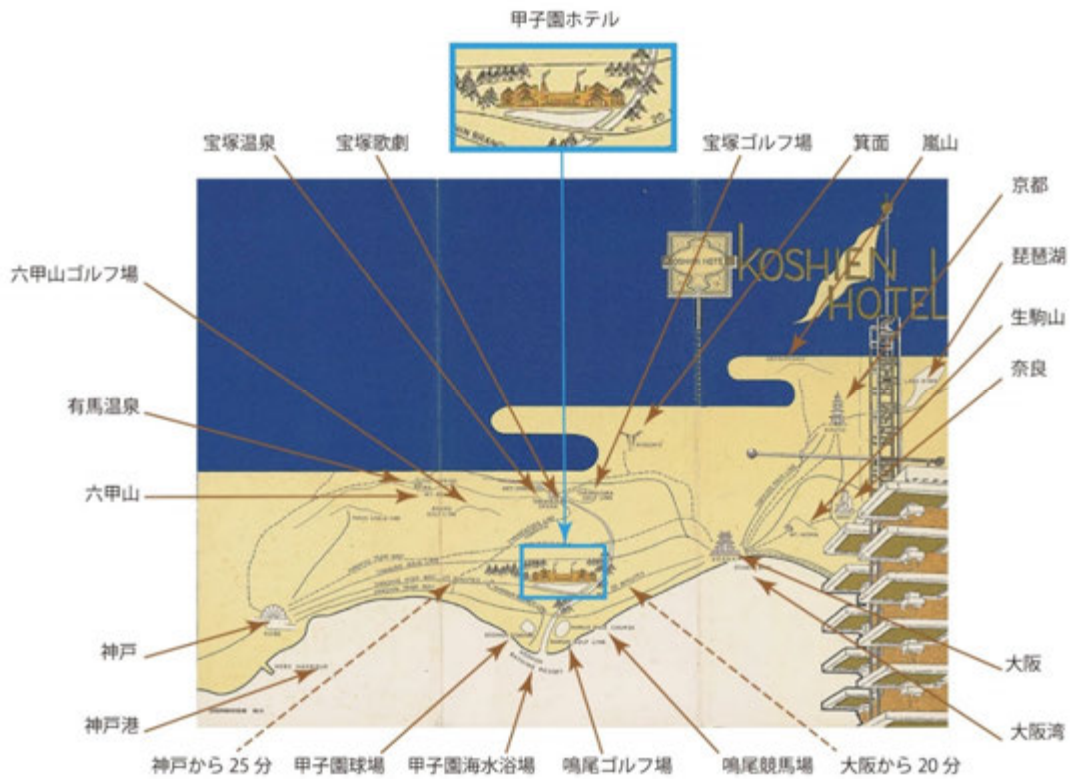


図 4-5 甲子園ホテル開業当時のリーフレットの表紙

娯楽はもちろんであるが、それらを越えて、阪神間、関西圏域との関係の中でとらえられている。そこには、ゴルフや競馬など欧米文化の楽しみに応えつつ、日本の伝統文化を体験を通じて紹介したいという林の明確な姿勢が読み取れる。遠藤もまた、そのことをよく理解していたと考えられる。

(4) 外観と景観

花苑都市のホテルは、4~5階建の大規模ホテルで、海岸のランドマークでもある。甲子園球場を背に南に見える海に向かって立つと、海浜まで緩いカーブを描く幅18mの幹線道路が、両側の街路樹と共につくるヴィスタライン上にホテルが見える。ホテルの規模、立地、外観などについては、オランダのデン・ハーグのパレスホテルに実例を求める(図3-3)。

甲子園ホテルは、4階建て75室の中規模ホテルである。リーフレットの裏表紙(図4-4)に、「二つの大陸にまたがり響きあう洗練を見出すだろう」と紹介されている。二つの大陸とは、西洋と東洋にまたがる大陸という意味であろう。日本と欧米とせずに、より大きな世界的視野を示そうとしていると思う。視覚的な特徴から通常ライト式建築といわれているが、西洋と東洋の調和を志していることが分る。

しかも、前述のように、「隔絶した美しい場所にある庭園に立地して」いる。これは、遊覧地の賑わいの中ではなく、鬱蒼とした松林の中を選んで建てたことを表している。遠藤は、ホテル完成から6年後、「甲子園ホテルの場合」(1936)と題して、南面する池を介し

て松林に建つ甲子園ホテルの姿について述べている。要約すると、松と同じ高さの緑釉瓦の寄棟屋根が水平に重なりながら、水辺に近づいていく。そして、寄棟屋根の一つ一つは、前述のスイートおよびシングルのおよび客室で構成されたクラスターの上に乗っていることもここで記しておきたい（図 4-6）。さらに水平の屋根の重なりとそれを垂直に破調するのが 2本の塔である。水平だけで構成された建築は弱く、破調して初めて力強く真の調和を得るというのである。

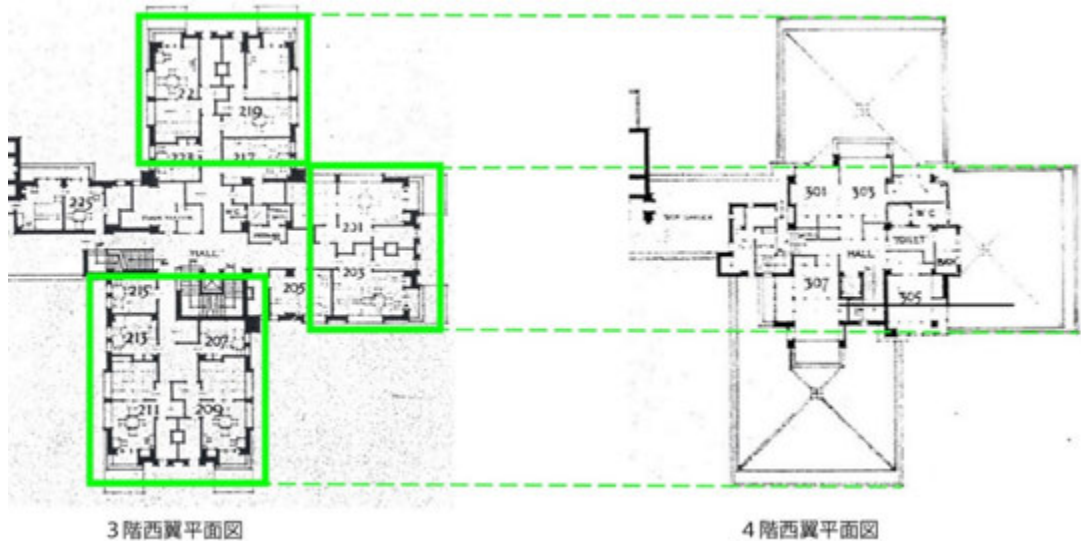


図 4-6 客室のクラスターと屋根の関係

塔は、松林より高いのでランドマークになっていたと考えられる。同時に、パンフレットの表紙では 3 つにたたむと一番目立つところに塔が描かれていることから、ホテルの象徴という意図が込められたと考えられる（図 4-7）。遠藤は、その塔が煙突であることを、完成当時発表した「甲子園ホテルについて」（1930）と、6 年後に発表した「甲子園ホテルの場合」（1936）で、繰り返し述べている。甲子園ホテルについての遠藤の記述が少ないだけに、塔が煙突であるということが遠藤にとってかなり大切だったのだと推察される。

甲子園ホテルでは、塔という形態は、煙突という機能と一体なのである。ライトの師ルイス・サリヴァンの言葉「形態は機能に従う」にもつながる考え方だと思う。ただし、煙は空に向かって上昇するので、塔は、単に水平の重なりを破る垂直というだけでなく、大地から空への方向性や繋がる順序をも含めていると考えられる。このことについては、第 5 章で再考することにした。

花苑都市のホテルは、広い幹線道路が両側の並木とともに構成するヴィスタの向こうに、海を背景に見えるランドマークである。その外観および立地は、前章でみたように、オランダの海辺のホテルをモデルとしていた（図 3-3）。一方、甲子園ホテルの場合、ランドマ

ークとなるのは松林の間に見える2本の塔である。閑静で美しい松林の間に池を介して見える外観には、西洋と東洋が調和しあうことによる洗練がある。それは、具体的には、松林の間の緑釉瓦の水平の重なりと、それを強く破調し、空へ向かう2本の塔によるというのである。

さらに、形態と機能に関して、遠藤は、ライトへの手紙の中で、ホテルを集合住宅のように設計したと述べている。このことについて、次に考察したい。

(5) 「集合住宅のような」ホテルと「宮殿のような」ホテル

甲子園ホテルの現場が急速に進行する中、遠藤新は、師・フランク・ロイド・ライトに宛てて手紙を書いている。日付は、1929年5月8日である。ホテルの開業が1930年4月15日であるから、完成までに一年を切っている。また、1929年5月28日の日付の着工前の図面より8ヶ月ほど前に、阪神電鉄にプレゼンテーションを行った際に用いたと考えられる図面は、完成したホテルに比べ平面・立面・断面図共に大きな相違があった。プレゼンテーションから竣工までが1年7か月であったことを考え合わせると、遠藤にとって一瞬、一瞬が決断の連続だったと考えられる。そんな中、筆不精を自称していた遠藤が、ライトに手紙を送ったのには、相応の理由があったと考えられるが、その理由については、別稿としたい。遠藤は、手紙の中で、外国語でホテルの設計について自分が感じていることを書くのは、ひどく骨が折れると述べている。しかも、文中、甲子園ホテルについての記述は、全体の5分の1を割くのみで、合わせて、僅か335文字72 wordsである。その短い英文に、ライトに伝えたい必要最小限の建築情報、つまり、甲子園ホテルについてのエッセンスを込めたと捉えてよいのではないかと思う。前述の「甲子園ホテルについて」、と「甲子園ホテルの場合」を補完する貴重な記述だと思う。

「私は、再び林さんのために働いています、林さんは、ホテル—林さんが古くからとって来た手綱 (harness) —を計画していて、大阪と神戸の間—あなたの山邑邸から遠くない、あのあたりで最も美しい場所 (spot) に位置します。

約75室、1800坪の中規模ホテルです。一半分は、日本式と西洋式2室のスイートで、

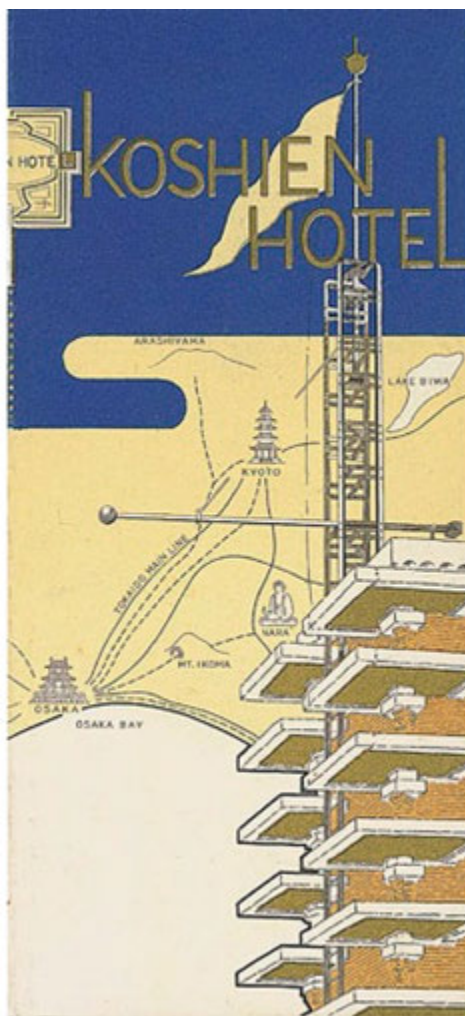


図4-7 開業当時のパンフレットを三つ折りにした場合の表紙

浴室がついています。

かなり家族向きのホテルで、配置(arrangement)は集合住宅のようです⁴⁻⁵⁾。」

もし、ホテルのサービスを馬に例えるなら、支配人の林にとって、ホテル建築は古い馬具(harness)のようであろう、という遠藤独自の隠喩がみられる。学生時代に林に出会ったことが縁で、ライトの許で帝国ホテルの設計に携わることになった遠藤が、甲子園ホテルの設計において、林の支配人としての手腕に寄せる深い信頼が伝わってくるようだ。

ホテルの敷地は、ライトの山邑邸から近い、最も美しい場所であるという。遠藤は、1922年に帝国ホテルを辞したライトの代わりに弟子としてライトの意図するところを忠実かつ熱心に究明し、帝国ホテルを完成した。そして、1924年、つまり帝国ホテル竣工の翌年、ライトがスケッチだけを残していた芦屋の山邑邸もまた、帝国ホテルの設計経験を分かち合った大学時代の後輩・南信と共に完成したのである。帝国ホテルは、左右対称の客室部分の片側半分を残す状態だったとされるので、経験値が高くはたらいたと考えられるが、山邑邸は、模索と専心によって完成したと思う。どちらも、「ライトだったらどのように設計するだろう」という自問自答の繰り返しであったであろう。しかも、普通に読むと、ライトの山邑邸はもちろん美しい場所にあるだろうけれども、甲子園ホテルは山邑邸のある場所も含んだ周辺地域の中で最も美しい、つまり明らかに山邑邸の敷地よりも美しい場所にある、ということになる。それは、よほど特別な、そしてそれゆえにライトに伝えたかったことだと思われ、このことについては、後に考察することにしたい。

ここでは、甲子園ホテルの敷地周辺について、遠藤は、めったにないほど美しい場所だと捉えていたと考えられる記述に注目しておく。遠藤自身は、建築が建ち新たに存在することで、敷地周辺とこれまでに無かった調和が生まれ、その場所を一層美しくすることを、建築設計の理想としていた。そんな遠藤にとって、この敷地との出会いは、それをこれ以上ないほど美しくするという使命を自ら担うことであり、建築家としてめったにない幸運と捉えていたと考えられる。

そんな場所に、「かなり家族向きのホテル」として中規模ホテルを建てつつあり、ホテルというよりもむしろ集合住宅のような配置・平面計画を行ったというのである。集合住宅という表現には、通常高級ホテルにふさわしいと考えられる邸宅や宮殿のイメージとは対極にあるようなイメージが想起される。大屋の海浜ホテルのモデルは、その名もパレスホテルで、王侯・貴族の暮らしへの人々のあこがれを引き受ける提案といえるだろう。そのような方向性とは別に、遠藤独自の配置・平面計画によって、甲子園ホテルには、従来のホテルを超え、日本人家族客が、海外からの宿泊客と共に、まるで集まって住んでいるかのようなアクティビティと空間的実感をもたらすように工夫したと捉えられる。ともすれば住宅より短い廊下や、全フロアに和室と洋室のスイートと洋室2室のスイートが隣同士で配置されたことは、「集合住宅」に込めた遠藤の意図に重ね合わせて捉える必要があると思う。同時にそれは、空間の「分かち合い」と名づけられるような空間体験ではないだろうか。

4-2 ホテルの立地について

(1) 松林の捉え方

林愛作がホテルのために選定した敷地が鬱蒼たる松林であったことは前述した。ここでは、このことについて、考察を進めたい。

もともと、武庫川から枝川、申川が分かれる鳴尾村周辺は松の名所だった。歌枕になり謡曲にも登場する。また、「鳴尾の一本松」は、沖の船からの目印になったといわれるほどの高さを誇っていた。松並木は海岸線だけでなく、武庫川、枝川、申川の両岸にもあった。甲子園ホテルの場合は、周囲の松林と調和するように、寄棟屋根を緑釉瓦で葺き、雁行させながら松林とほぼ同じ高さの4層に重ねていた。当時の新聞には、その佇まいが「清楚」と評されている。

甲子園ホテルの工事が始まるころから、阪神電鉄は、電鉄線以北の住宅地の第1回分譲（1928）を行い、ホテルが完成した頃、第2回分譲（1930）をおこなっている。平均約200坪が基本区画の高級住宅だった。売り出しの際、以下のような宣伝を行っている。

「南は甲子園海水浴場より北は武庫川の清流に接し右顧すれば茅海の白帆を数へ左眇すれば六甲の青峰を望み鬱蒼たる松林その間に連なり空気清浄気候温和⁴⁻⁶⁾」

松林を、景観の美しさを示す要素としてむしろ積極的に謳っていることがわかる。野田誠三も、以下のように回顧している。

「甲子園は、いたるところに大きな松があつたりして、中流向きの住宅には適しない。建売などは金持ち連中は買わないと見当をつけ、大きくとった地面で売ることにした。つまり、高級豪華住宅地の売り出しをやったわけです⁴⁻⁷⁾。」

一方、甲子園ホテルについては、次のように語っている。

「開業後間もなく高松宮さまが新婚旅行でお泊りになったが、そういう高級ホテルです⁴⁻⁸⁾。」

以上から、阪神電鉄関係者は、松が、ホテルと住宅地の両方の高級感を高める相乗効果を促す役割を与えたと捉えられる。特に天井川は、地盤が周辺より高いために、もともと阪神電鉄は、廃川敷の新開発地を住宅地として良好と判断していたことも付記しておきたい。結果として、甲子園ホテルは、これら的高级住宅地のイメージをつくる核としての役割を果たし、遊覧地と住宅地の特徴を際立たせたと捉えられるのである。そこには、新しい大衆文化を表す遊覧地と、鳴尾に昔からあった伝統的な日本の景観美を活かし引き継ぐ高級住宅地が、対照的な雰囲気をかもし出したのではないだろうか。

遊覧地において、松は運動場やテニスコートの確保のために伐採の対象となっていたようであるし、新時代を切り開くための伐採と受け取られるなら、切り捨てられるべき古い文化を象徴していたのかもしれない。現在の甲子園球場の位置にも、松が生い茂っていたことがわかる（図4-8）。

このような既存の松林について、大屋霊城は、「二つの花苑都市建設に就いて」では、特に触れていない。しかしながら、実際の公園や都市の計画において、大屋は、針葉樹を否定的に捉えており、当然松も例外ではなかった。例えば、「進め過群から花園へ（6）」（1923）

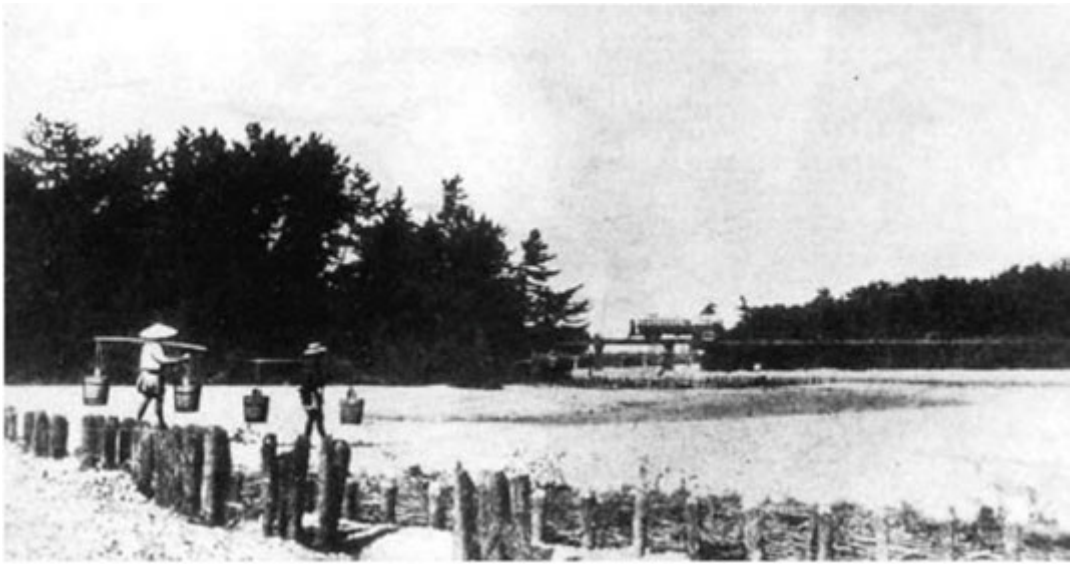


図 4-8 甲子園球場建設前の枝川兩岸の松林(右側)・申川(左側)兩岸の松林

では、庭の樹木について次のように述べている。

「庭木の如きも松、杉の如きをなるべく避けて常緑樹に於いてはカシ、シヒモチ⁴⁻⁹⁾」
さらに街路樹に関しては、「街道樹論(2)」(1919)において、次のように述べている。

「カシやシヒと云ふ様な常緑照葉樹や、マツ、スギ、ヒノキ、マキと云ふ様な針葉樹は市街の並木としては喜ばれぬ、神社や仏閣の参道には多く松やスギの類を並木として見るが市街にこんな常緑樹を植えると路面が乾かないのと光線が透さない為に秋から冬にかけて湿潤であり且陰鬱である。また、葉の色に変化が常に同じであるから景色に変化がない、従って特に町を荘厳に見せると云ふ様な特殊の場合でなくては常緑樹を用いることは稀である⁴⁻¹⁰⁾。」

針葉樹は常緑照葉樹とともに、路面が乾かず日光が差しにくいので、特に秋から冬は、街路に湿っぽく暗い印象を与える。また、年中葉が同じ色なので、変化による面白みががない。この2点が、神社仏閣のような荘厳な雰囲気が必要な場合以外、街路樹に適しない理由であるという。したがって、大屋の遊覧地が実現していたならば、ホテルへ向かう幹線道路沿いの街路樹には落葉樹が選ばれ、両側に2重の並木道を形成したと考えられる。以上の大屋の主張は、阪神電鉄側に、遊覧地のための近代的な新しい都市景観には、広葉樹がふさわしいとの考えを促したのではないかと思う。同時に、既存の松林に対しては、電鉄自体が打出した「甲子(きのえね)」の未来志向とは逆のイメージを持たせる要因になったかもしれない。

松林を生かした甲子園ホテルは、結果的には遊覧地ではなく、高級住宅地として分譲した住宅地の核となり、そこに生い茂る松林を効果的に演出する役割を担ったと捉えられる。アクティビティの視点から見ると、「ホテルというより集合住宅」という遠藤の言葉は、「滞在する」というより「住まう」とも捉えられ住宅地の核として符合する。

(2) 灌漑用貯水池としての大湯池

甲子園ホテルに南面し、庭園の一部となり、滞在客による舟遊びが行われた大湯池は、ホテルのリーフレットには crystal-clear lake として紹介されている（図 4-4）。清冽な水をたたえた池であったことが想像される。同時にこの池は、渇水時には、周辺の田畑に農業用水を供給するという役割を担っていたことが、以下の新聞記事からわかる。日付が、1929（昭和 4）年 7 月 2 日であるから、ホテルの工事が進行していた時期である。

「鳴尾大湯貯水池の水は植付用に放流し渇水したので鳴尾村では阪神電車との契約に基づき同池にモーターを据付け地下より灌漑用水を吸い上げ供給するやうに阪神に交渉したところ承諾したのででいよいよけふより 20 馬力のモーターを据え付け供給することになった。なほ大湯の池は鳴尾より阪神電車に年 500 円で借し早魃時にはモーターを据付ける契約条件があり早速契約通り履行したものであると⁴⁻¹¹⁾」

記事から、まず、大湯池が鳴尾村の農業用水の貯水池であることがわかる。そして、阪神電鉄と鳴尾村の間には、大湯池の貸借に関する契約を締結していること、それに基づく最初の実施が行われたことを表している。具体的には、阪神電鉄が、鳴尾村から年 500 円で大湯池を借りているだけでなく、水量が減少したときは、モーターで地下から水を吸い上げて適量となるまで補うというものである。ホテルの和室と洋室のスイートルームに二人で一泊すると 15 円であったから、500 円であれば、1 カ月以上滞在できる金額である。さらに地下から水を吸い上げるための工事とポンプの設置がある。庭園の景観の一部として整備し、舟遊びをするために支払う金額として高額なのかそうでないのかは、これらの情報だけではなんともいえない。また、ホテルは、阪神電鉄から独立した「株式会社甲子園ホテル」として開業したので、阪神電鉄が年間に鳴尾村に支払う 500 円と井戸及びポンプの設置は、ホテル経営には直接の関係がないことも付記しておきたい。

一方、1922（大正 11）年、阪神電鉄が、枝川・申川廃川敷を兵庫県から譲渡される際には、以下のような条件があった。

「道路や水路敷地用の 2 万 596 坪を除く 22 万 4000 坪について、総額 410 万円を約 6 年間に計 7 回の分割払いで支払うというもので、これに加えて廃線敷地の整備と農業用水路の整備費用に 20 万 3000 円を負担する⁴⁻¹²⁾」

枝川・申川は、水害の元凶であったとはいえ、一方では、灌漑用水を供給する役割を担ってきた。完全に廃川となると、鳴尾村の用水路には、灌漑用としての水の流れに変化が起こるのは明らかであったろう。一方、用水路の所有については、廃川敷の譲渡とは関係なく、変化がなかった。そして、廃川後、兵庫県が鳴尾村に対して行う整備費用は、阪神電鉄が負担することになっていたのである。一方、ポンプを設置して地下水を汲み上げて行う大湯池の貯水補給は、阪神電鉄と鳴尾村との間の契約である。つまり、この契約は、廃川敷譲渡時の阪神電鉄と兵庫県との間の契約からは独立していたと捉えられる。

(3) 住居地の水道のための水源地

甲子園開発地について、道路と用水路の整備は兵庫県が行ったわけだが、遊覧地や住宅

地には、その他ライフラインとして、電気と水道が必要である。電鉄会社であれば、電気の供給は問題なかったと考えられるが、水道についてはどうだったのだろうか。大屋が述べていたように都市生活に必要な施設は、近接する都市から援用するという考え方が一般的だろう。しかしながら、当時鳴尾村周辺に水道設備はなかった。一方、甲子園駅以北の住宅地の分譲に際して、前掲した宣伝文では、次のように続けられている。

「経営地はどこを掘りましても清冽氷のような水が滾々と湧き出まして夏冬を通じ豊富不変の水量を湛えております。尚、水道設備は目下設計出願中で近く着手の計画であります。」⁴⁻¹³⁾

現在、2 か所で見ることができる鳴尾の義民碑は、16 世紀、太閤秀吉の時代に鳴尾村と枝川を挟んだ瓦林村との間の水争いで死罪となった人々を祀る。水害だけでなく水不足のための悲惨な歴史があるのだ。一方、技術力が進歩した昭和初期には、天井川の廃川敷に井戸を掘れば、どこからでも水が湧くという。このことは、廃川敷の地下に、伏流水が存在することを示していると考えてよいだろう。

また、電鉄社史には、さらに具体的な記述がみられる。

「昭和6年4月に上水道を完成した。水源地は武庫川と旧枝川の分岐点で、240尺の地底からポンプによって揚水し、前甲子園経営地に供給を開始したが、一昼夜1万石の割合で揚水しても水位が狂わぬというほどの用水量であった⁴⁻¹⁴⁾。」

甲子園ホテル開業の翌年1931(昭和6)年には、甲子園開発地の隅々に上水道が通ったのである。240尺とは、約72mであるから、相当深くに井戸を掘り、地下水をポンプでくみあげたことになる。一石は、約1800tであるから、豊富な清流が、甲子園ホテルの敷地を含む廃川敷の地下深くに流れていたと考えられる。深さからみて、西宮から神戸にかけての酒造が仕込み水に用いた宮水と同様、六甲山の伏流水と推察される。

「水源地は武庫川と旧枝川の分岐点」であるから、まさに、大湯池と甲子園ホテルが位置する場所である。灌漑用水の貯水池であった大湯池と、上水道の水源地の正確な位置関係は現時点では良くわからないが、上水道の水源地は、鳴尾浄水場に統合された甲子園浄水場である。

一方、大屋霊城の花苑都市では、明らかに大湯池が水源地と表記されている(図4-9)ことが注目される。また、それが、園芸場と隣接していることも注目される。園芸場について、大屋は、次のように述べている。

「この花園都市(ママ)には、園芸場はつきものにし、例えば、活動に飲食店がつきものなると等しく、時に各戸の庭園花壇の指導に当たり又時に種苗を供給しました日常の花弁および野菜、果実を供給するなり。かくてその都市の住民は年中常に新鮮なる野菜と花と果物に恵まれ真の楽園に住むの心地するなり⁴⁻¹⁵⁾。」

大屋は、甲子園花苑都市において、甲子園ホテルが立つ場所に、園芸場を配置している(図4-9)。その場所において、花苑都市における居住者が、庭園や花壇で野菜や花を育てる方法を学び、そのために必要な種苗の入手を行うためである。大屋は、園芸場を、花苑都市らしい生活を楽しむために欠くことができない構成要素と考えていた。娯楽地におい

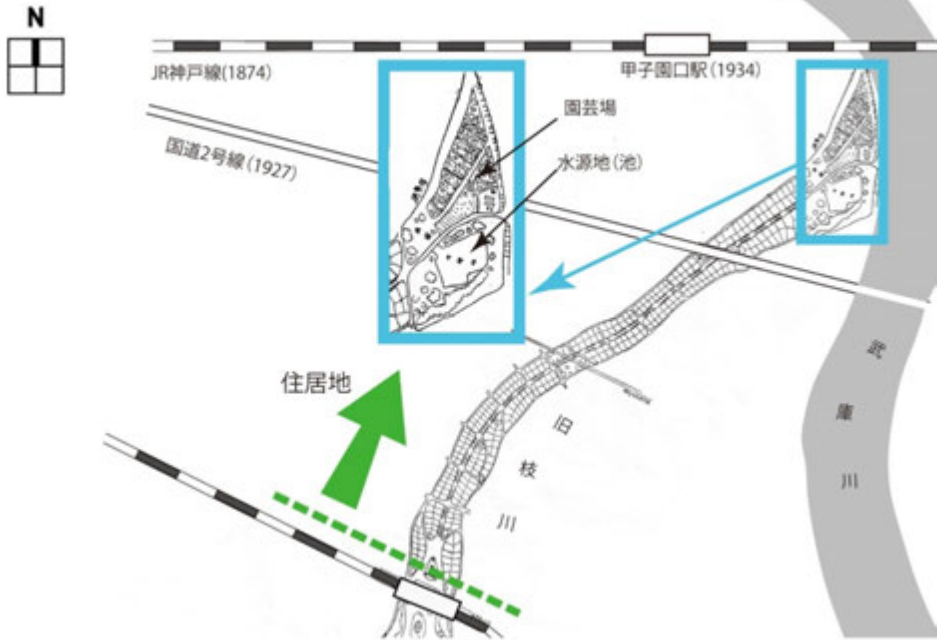


図 4-9 甲子園花苑都市の住宅地と園芸場および水源

て飲食が欠かせないのと同様に、居住地に園芸場は不可欠というのである。園芸場があつてこそ、人々は、身近に自然と親しむ生活を楽しめるし、そのような生活こそが花苑都市らしい生活なのである。大屋は、自らの花苑都市において核となる園芸場を、その意味で非常に大切な場所と捉えていたといえるだろう。

さらに、園芸場に近接する池には、「水源地」の表記が読み取れる（図 4-9）。甲子園ホテルのリーフレットにおいて、水晶の池（crystal-clear lake）と謳われ、滞在客が舟遊びをした池と近接する位置にある。前述のように、池に繋がる水路によって近隣の田畑に農業用水を供給した池でもあり、地域の人々には、大湯池という長年親しんだ呼称があった。大屋が、甲子園という地名を掲げながら、大湯池という名称を用いず、「水源地」と表記したのは、周辺地域の歴史よりむしろ、名称が示すと通りの機能・役割を重視していたためだと考えられる。つまり、新しくできる甲子園花苑都市に生活する人々への飲料水の確保という役割である。大屋は、花苑都市に必要な上水道については、近接する都市の既存施設を援用する考えを持っていたが、当時の西宮市（旧鳴尾村、旧瓦林村）には、そのような施設は整っていない。いずれにしても、大屋は、遊覧地には、飲食の施設が欠かせないように、住宅地には、「飲」のための水源地が「食」のための園芸場と共に欠かせないと考えて、花苑都市生活の「源」として、二つを隣接させたのではないかと推察される。

一方、阪神電鉄社長・野田誠三は、社史の中で水道の必要性と水源の確保について、次のように振り返っている。

「高級豪華住宅地の売り出しをやったわけです。それと同時に水道が入用になり、武庫川

と元の枝川の分岐点に水源地をつくった。その頃は地元の瓦木にも鳴尾にも水道などなかった。なかなか立派な水道ができましたよ⁴⁻¹⁶⁾。」

阪神電鉄も、大湯池および甲子園ホテル付近を経営地の上水道の水源地と捉えていたことが分かる。さらに、「高級豪華住宅地の売り出し」とは、阪神甲子園駅以北の住宅地の分譲、つまり、1928年の第1回分譲と、1930年の第2回分譲を指すと考えられる。

以上の考察から、大湯池が、1931（昭和6）年に完成した上水道の水源地になる選択肢もあったように思う。いずれにしても、林愛作が阪神電鉄側にいた以上、林と遠藤は、二人とも甲子園ホテルの敷地近くに上水道の水源地があることを知っていたことは間違いないと思う。特に、ホテルの開業と、住宅の分譲の時期を考え合わせると、上水道は、ホテル開業のために住宅地と同時期に必要なだったと考えられる。

ホテルの敷地は、林にとって、西の迎賓館にふさわしい景観をもつものであった。そして、遠藤にとっては、周辺地域の中で「最も美しい場所」だった。同時にそこは、新開発地の上水道と周辺地域の灌漑用水の両方の水源地の畔でもあった。そこに、大屋霊城が、花苑都市の核として欠かせない園芸場を配置したことを考え合わせると、甲子園ホテルの設計趣旨を考察する際に欠かせない敷地条件であると思う。

5. 考察

5-1 ホテルにおけるアクティビティ

「他者」を「利する」という「利他」の視点から、二つのホテルの比較を進めてきた。まず、「他者」とは誰かについてみると、大屋霊城は、日本人、特に関西人を対象としていた。それに対して、林愛作と遠藤新は、国内外の賓客から一般の宿泊客までを対象とし、そこに、女性、子供、家族という、甲子園ホテル以前のホテルには無かった対象を新たに設定していた。その分、「他者」へのまなざしは広く、細やかだったといえよう。そこには、ホテルの役割として単なる「宿泊」を超えて「住む」に近いような、できるだけくつろいだ体験を提供しようとする意図が読み取れた。

次に、「他者」である滞在客を「利する」とはどのようなことかについてみると、大屋は、特に関西人が大切にする「飲食」のアクティビティを、ホテルの基本的なアクティビティである「宿泊」や「滞在」と繋ぎ、両者の相乗効果による楽しさの促進を実現しようとした。大屋の花苑都市は、自然美と、心身を癒し楽しませる文化を兼ね備える。その中の遊覧地やそれを特徴づけるホテルは、特にそのような役割を担うと考えられる。そのため、ホテルの1階にはカフェ、2階以上にレストランと宿泊のための空間を配置している。同様に、ホテルの外では、海辺のリゾート地に来たからこそ可能な「海水浴」や浜辺の「散策」と「飲食」とを、癒しや楽しさをもたらすアクティビティの連鎖につなごうとした。そのために必要な娯楽・運動の施設と飲食の施設とを規模・数に配慮しながら設置した。

同時に、ホテルが立地する遊覧地において、都市の喧騒から離れ、「自然美、清楚、平和、

閑静」を実感できるように、娯楽、飲食に必要な施設を密集させず、「自然美」ある緑の中に分散して配置した。花苑都市の本来の存在理由と同様、遊覧地においても過剰な密集を避け、自然美の中での施設の分散を条件としたことは特筆される。

一方、遠藤は、あたかも家にいるかのようにくつろいだ「滞在」や「宿泊」のために、ホテルを集合住宅のように計画・設計した。まず、十分なプライバシーの確保をするために、通常のホテルにみられる出入りが見通せる長廊下をやめ、客室をクラスター状に配置して短い廊下でつないだ。さらに、スイートの場合は、浴室付きとした。同時に、各室が十分なサービスを受けられるように、クラスターの中央に仲居（女中）の控える場所を配置した。さらに、日本人家族のための客室は、布団による睡眠や和装の身づくろいなどに対応できる和室と、食事のための洋室のスイートとした。

このことによって、国内のホテルで初めて、日本人も、海外からの宿泊客同様、日常生活様式に合った滞在が、家族で可能となったのである。また、どの滞在客も、自分の部屋の位置によって異なる窓からの景色とは別に、3階の屋上テラスに出れば、等しく南の白砂青松の海岸や北の六甲山系の眺望を楽しむことができる（図 4-1）。庭に降りて南面する池の舟遊びに興じることもできる。食事には、1階のレストランや宴会場を利用するが、遊覧地ではなく住宅地に隣接することから、滞在期間のアクティビティは、ホテルの敷地内での展開を基本とし、遊覧地を含む近隣のスポーツ・文化施設や都市へも、気が向けば自動車、電車またはバスを用いて足を延ばすという滞在の仕方である。

大屋も、林と遠藤も、利用客としてそれぞれが設定した「他者」が、それぞれのホテルが建つ場所の立地条件や特徴を十分に実感し、楽しむことができるようなアクティビティを準備し「利する」計画をおこなったといえる。少なくとも、日本において他に先駆けた側面として、大屋のホテルは、娯楽施設群の過密から自然への解放、甲子園ホテルは、国・文化・社会的立場・性別・年齢などを超えた宿泊のニーズへの十分な対応を計画の基盤に据えていることが注目される。

5-2 ホテルにおける空間の「分かち合い」

甲子園ホテルの客室部分には、さらに空間の「分かち合い」ともよべる工夫が見られる。それは、海外の滞在客と日本人家族客が、各フロアの東西両ウィングにほぼ同じ割合で滞在できることによる。それは、対象とする滞在者の属性から発した計画・設計の判断によるといえよう。和室と洋室のスイートは、洋室 2 間のスイートと同数が設置されているためである。このことは、別の生活文化をもつために「宿泊」や「滞在」に対する要求が異なる客たちが、前述のように十分にそれを満たされながら、同じフロアと同じウィングに空間を分かち合って滞在していることを意味する。

その最小単位であるクラスターは、2種類のスイート 1 室ずつと浴室が共同のシングル 2 室から構成され、一つの寄棟屋根の下にある（図 4-6）。つまり、家族であれ単身であれ、国内外の宿泊客が、前述の十分なプライバシーとサービス、それぞれの生活様式への対応

を享受しながら同じ屋根の下に「滞在」するのだ。宿泊客は、国・文化・社会的立場・性別・年齢などによる違いを超えて一つ屋根の下の空間を「分かち合い」ながら、自宅にいるようにくつろいで滞在する。それが、遠藤がいう「集合住宅のような」ホテルの様態である。「住宅より短い廊下」という表現は、大邸宅の場合は、多少誇張しているかもしれないが、集合住宅という観点からはうなずける。そのような空間の「分かち合い」により、家にいるようにくつろいだ「平和」な雰囲気を具体的に提供することは、いわゆる快適という以上に深く「他を利する」建築設計における実践ではないかと思う。

一方、大屋は、遊覧地の品格を「自然美、清楚、平和、閑静」という言葉で説明し、「平和」という言葉を実際に用いている。例えば、緩やかなカーブを描く幹線道路の上を、路面電車より騒音の少ないバスでホテルへ向かう人々が感じる「平和」は、都会の喧騒から逃れることで心が取り戻す穏やかさではないかと思う。大屋の花苑都市は、そもそも都市における極度に過密な生活環境つまり「過群」の状態を変革するために構想されたものであったからである。そうであるならば、花苑都市を特徴づける「平和」な雰囲気は、甲子園ホテルの空間配置がকাশ出す「平和」の雰囲気とは質的に異なるように思う。

言葉を換えると、甲子園ホテルでは、滞在客である「他者」に、世界平和とは人と空間のどのような関係や在り方を指すのかを、空間の「分かち合い」を通じて体験的に実感させて「利する」。このことは、針葉樹である松を、海外からの賓客を迎えるホテルの屋根のデザインに積極的に取り込んだことにも通じる。その結果、日本の原風景を構成する松林と調和したホテルの建築美を、外国人だけでなく、日本人滞在客の目にも楽しませることになった。それもまた、甲子園ホテルに特徴的な「利他」といえるだろう。大屋が、欧米の近代都市計画を参照して自らの仕事において実践するにあたり、日差しや季節感を考慮する「利他」ゆえに、社寺の参道などを例外として、街路や庭園から針葉樹を排除したことと対照的である。

5-3 水源地から湧き出る水の「分かち合い」

甲子園ホテルを、上水道と周辺地域の灌漑用水の水源地に隣接して配置したことにはどのような「利他」があるのだろうか。そこは、阪神電鉄が遊覧地にもともと準備してあった敷地を「こんなところは珍しくない」と断った林の目に適う場所であった。そして、遠藤にとって、そこは、周辺地域の中で「最も美しい場所」でもあった。同時に、そこは、水源地という機能をもつ場所でもあったのだ。

いうまでもなく、上水道は、遊覧地、住宅地を問わず、甲子園開発地の人々の生活または活動の源であるし、灌漑用水は、周辺地域の農業活動と農作物の生育の源である。まさに命の源である水を、必要とする人や場所へ十分にいきわたらせることは、枝川、申川、磨川以前は不可能であった。人々は日照りによる水不足と台風による水害に苦しんで来たのだ。常時適量の水を得ることは、近代の工学技術によって地下深くの清澄な伏流水を汲み上げることで初めて可能となったことが、阪神電鉄社史や新聞記事から読み取れる。

大屋の場合は、水源地に隣接して、花苑都市に欠かせない園芸場を配置した。園芸場は、花壇や庭園の手入れの方法を教え、花卉や蔬菜の種苗を供給する役割を持つ。園芸場によって、花苑都市では、自然中心または庭中心の生活が可能になる。そのような園芸場こそが、花苑都市の核であるというのが、「二つの花苑都市建設に就いて」から読み取れる大屋の主張であった。大湯池と近接する位置には「水源地」の文字が読み取れ、大屋自身がその機能を明示している。そして、花苑都市では、水源地と園芸場によって、市民である「他者」を、飲食の源の「分かち合い」に導くことで「利する」。しかしながら、大屋の意味する水源地が、周辺地域の灌漑用水としての利用を含んでいたのかどうかは、確認できず、新たな課題である。

同様に、林と遠藤の場合は、水源地とホテルによって、ホテルの滞在客である「他者」を、上水道の水とホテル空間両方の「分かち合い」に導き、「利する」。一方二人が、大湯池に、「水源地」という言葉を用いた事例がみあたらない。ホテルのリーフレットには、crystal-clear lake として、透明な水を湛えた池であることを示し、滞在客の舟遊びの場となることを記すのみである。

そこで、視点を変え、水源地と園芸場、あるいは、水源地と甲子園ホテルの関係について、それらを隣接させているという事実の背後にある理由、つまり、それらを結びつける計画者の意図について考えてみたい。

まず、水源地の水と、住居地の庭中心の生活を可能にする園芸場を、飲食による生命の源として隣接させたのであれば、大屋にとっては「生命の源」が、隣接の理由または意図に相当するといえるだろう。しかしながら、その場合の「生命」が、花苑都市の市民と動植物だけのものか、広く花苑都市周辺の地域にわたるものなのかについて、大屋は、文章による記述や図面による表現を残していない。

では、上水道および農業用水の水源地と甲子園ホテルの隣接については、どうであろうか。もちろん、林と遠藤がその場所が水源地であると知っていたのであれば、ホテルの敷地が希少で美しいと感じる心にも大きく影響をしたのではないかと思う。しかし、水源地という機能について、ふたりとも、文章による記述を残していない。

一方、開業当時のパンフレットや食器、さらに建築装飾と空間から読み取れるのが、ホ



図 5-1 大宴会場(現・西ホール)入口の
泉水と打出の小槌の装飾

テルのシンボルマーク・打出の小槌による「豊穡の水」の物語なのである⁵⁻¹⁾。物語のあらすじを示すと、まず、ホテルのランドマークである2本の塔が、大地から天に向かって雨を迎えに行く。塔はそれ自体垂直に空に向かうが、同時に煙突の機能を併せ持ち、中を通過する煙もまた天を目指す。それに応えて、天から降りてくる雨水に、屋根の棟飾りをはじめ、建築の内外にある打出の小槌（をモチーフとする建築装飾）の霊力が込められる。霊力を得た雨水（豊穡の水）は、甲子園ホテルの内外に降り注ぐ。建築装飾としては球体（水珠）として表現される。それらと打出の小槌の装飾との配置から、霊力を得た雨水は、大湯池（灌漑用水の水源地）に流れ込むことが読み解ける。これらによって、霊力を得た雨水は、ホテルの滞在客だけでなく、周辺地域の農作物を潤していく。

前述したように、甲子園の開発を契機に、上水道や灌漑用水の水源地を甲子園ホテルの付近に定め、そこから伏流水を汲み上げた事実は、阪神電鉄の社史や当時の新聞記事から明らかである。その観点から、宴会場の入り口にある水盤（図5-1）をみると、豊かに湧き出る水への林と遠藤の考え方が、よく表現されていると思う。水盤は、日華石の2段の桝からなり、水が湧き流れ落ちる上段と、水を受ける下段には、それぞれに打出の小槌の彫刻がある。水が湧き出る趣向は、ホテルの内部空間においては、この泉水のみにみられる。天からの恵みの雨だけでなく、水源地から滾々と湧き出る清冽な水もまた、打出の小槌によって祝福され霊力が込められるということを表現していると思う。その豊穡の力が、上水道を通じて、ホテル滞在客、さらには甲子園開発地の人々へいきわたる。同時に、大湯池から用水路を通じて、地域の農村へといきわたるように構想したと想像されるのである。

昭和の初期は、日露戦争後に始まった日米関係の悪化が顕わになり、移民や輸出入に制限が加えられ、日本の財政は逼迫していた。林の場合、日露戦争に日本が勝利した4年後の、1909（明治42）年に帝国ホテルに就任し、1917年（大正2）年、アメリカ人であるフランク・ロイド・ライトを新帝国ホテルの建築家として契約した。家族と共に住んだ朋来居（現・電通八星苑）はライトの設計で、1917（大正6）年の完成である。林は、そこに、アメリカから来日した議員団を招きもてなしたという。林愛作の令孫・林裕美子氏によれば、議員団と林家が家族ぐるみで楽しんだ写真が残されているという。

林が、甲子園ホテルにおいて家族でのホテル滞在を重視したのは、ひとつには、真の文化理解は、家族ぐるみでなければならないという信念から発しているのではないかと思う。林の行動は、太平洋戦争を経た現在からみると、一見、時代の流れと逆行しているように見える。しかしながら、朋来居が完成した1917年から林が帝国ホテルを去った1922年までに視線を移せば、米国議員団家族の訪問は、日米関係を修復して平和を求めていく外交的努力を、帝国ホテルが支えていたことの顕れではないかと捉えられるのである。もともと、ヨーロッパではなくアメリカで活躍していた林が帝国ホテルの経営陣に招かれ、支配人を務め、アメリカ人建築家を指名した背景でもあるのではないだろうか。

1914（大正3）年に東京帝国大学を卒業した遠藤の卒業設計はホテルである。そして、卒業論文はそのための調査を踏まえた計画をまとめたものである⁵⁻²⁾。その内容から、遠藤は、

帝国ホテル支配人として第一線で活躍する林の意見や助言をかなり参考にして取り組んでいたことが推察されるのである。しかも、卒業論文の冒頭は、「世界に平和を！」(図 5-2)から始まる。林と遠藤の国、文化、平和への思いと共に新帝国ホテルに描いた構想は、日米関係と世界情勢に対する日本人としての自らの立場の表明であったと考えられる。

そうして、林と遠藤が甲子園ホテルの建設に関わり始めたのは、満州事変の僅か3年前である。窮乏と戦争ではなく、豊穡と平和にこそ希望を託し「豊穡の水」の物語として、それを新開発地にたつホテルの建築表現に込めたのではないかと思う。ただし、この物語は、あくまでも甲子園ホテルを運営していくに際して必要だった建築(および図面)、食器、リーフレットなどから読み解けることで、林と遠藤が、文章として記述を残したり、言葉にして話をしたりした事実は見つかっていない。しかしながら、「利他」を視点として解釈した場合、例外と考えられる語句があり、次に見ていきたい。

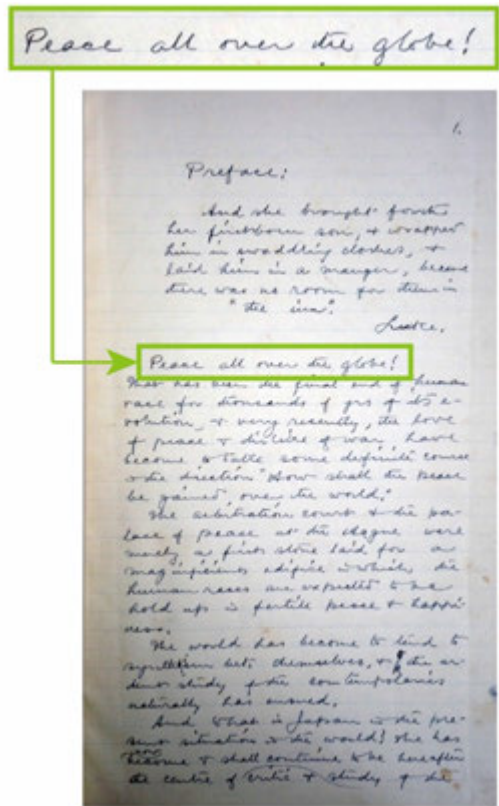


図 5-2 遠藤新の卒業論文(1914)の序文：聖書引用後、冒頭に“Peace all over the globe! (世界に平和を!)”を掲げる

5-4 ランドマークとしての2本の塔

(1) 意味と役割

ランドマークの役割を果たしたと考えられる甲子園ホテルの2本の塔について、遠藤は「甲子園ホテルの場合」(1936)に短い記述を残している。これは、甲子園ホテルにおける建築と庭および周辺環境との調和を如何にして図ったかを述べた、それ自体短い文章である。松林と同じ高さで重なり合う緑の瓦屋根が池の水面に近づいていく様態を佳人に喩えた後、以下のように続けている。

「然しこれ丈けでは凡てがあまりに静かで弱い。

そこで2本の塔(実は煙突)が強く破調する。

静かに俯していたものが一擲三外して忽焉として天心を仰ぐのです。

ここに来て初めて環境を一括した統合が完了するという順序⁵⁻³⁾

甲子園ホテルは、人間に喩えるなら、静かに伏していたか弱く美しい女性であると同時に、「一擲三外して忽焉と天心を仰ぐ」者でもあるというのである。この比喻は、遠藤のい

わゆる文学的表現として受けとめるに留めることもできるだろう。しかしながら、引用文において、「実は煙突」という括弧内の表現が、文学的というよりはむしろ唐突に説明的で、違和感を覚える。

一方、リーフレットの表紙(図4-5, 4-7)を見ると、流水紋で分けられた上部(青色の部分)が天、下部(黄色の部分)が地を表わすと捉えられる。そして、塔の上部以外で、天にあるのは打出の小槌だけである。したがって、塔が仰ぐ天の心とは、打出の小槌が象徴する(密教においては三昧耶形である)大黒天の心と捉えてよいと思う。

以上を考え合わせると、二本の塔は、大黒天の心を仰ぐために、「一擲三外」として捉えられる。「一擲」とは、通常、何もかもを一度に投げ捨てるという意味である。「乾坤一擲」または、「一擲乾坤」のように用いる。この場合、「乾坤」とは天地であるから、投げ捨てる対象は自らが生きる現実世界のすべてを意味するであろう。つまり、「乾坤」は、投げ捨てる対象として最も大きな世界といえるかも知れない。さらに、それを、物体としての輪郭線を持たないという意味では無限ともいえる人間の心を想定し、そこに存在する執着や迷いの世界に置き換えてみる。すると、「一擲三外」の「三外」とは、仏教における「三界」を意味すると捉えられるのではないだろうか。特に、「界」に「外」を当てているのは、欲界、色界、無色界という三つの「界」を「一擲」する、つまり投げ捨てることを強調し、真にその「外」に出て、迷いと苦しみの輪廻から出離転生することを意味しているのではないかと思う。同時に、それは、人の心の状態が、まさに「利己(自利)」から「利他」へと、確固として後戻りすることなく移行を遂げることでもある。

もし、そうであるなら、建築が「静かに伏す」、それだけでなく、さらに「一擲三外して忽焉と天心を仰ぐ」、それによって、建築と庭とが「環境を一括した統合」を成就すると述べる遠藤の意図はどこにあるのだろうか。

ひとつには、甲子園ホテルが完成した年、遠藤が、「甲子園ホテルについて」(1930)で、「林さんのホテル」を設計した、つまり、ホテルのサービスや運営を知り抜いた林のホテルを設計した、と述べていることに手がかりがあるのではないかと思う。少なくとも、林が理想としたサービスの方法や運営の在り方に寄り添うように遠藤は甲子園ホテルを設計したことは確実であろう。一方、密教における顕幽一如という考え方を、遠藤が理解し把握していたとすると、ホテルに関わる人々にとって、建築は明らかに目に見え触ることができる「物体」としての「顕」、サービスや運営は建築と一つになってホテルを成り立たせる「はたらき」としての「幽」に対応すると捉えられるだろう。したがって、両者が「一如」、つまり、ひとつであるのであれば、建築だけでなく、サービスや運営もまた「静かに伏す」だけでなく「一擲三外」するものでなければならないと思う。

つまり、支配人としてサービスや運営の要にある林を先頭に、林のもとで働く人々は、宿泊客のために細やかなサービスに努めるだけでなく、自らの「利己(自利)」の心を捨てきり、「利他」の心となって大黒天の心を仰ぐ。それによって、はじめて、「環境を一括した統合が完了」し、建築は庭だけでなく周辺環境とも完全に一つになることが出来るとい

う意図ではないかと思う。

では、2本の塔が仰ぐ大黒天の心とはどのようなものだろうか。「大黒天 神勤行儀⁵⁻⁴⁾」において、大黒天は、「種々の珍菓美酒を以て供養せば將に甘露の雨を降らさん⁵⁻⁵⁾」と約束していることが注目される。そうであるならば、甲子園ホテルの場合、「一擲三外」した上で、「種々の珍菓美酒を以て供養」するのは誰なのか、という問いが得られるだろう。

顕幽一如という観点からすると、「種々の珍菓美酒を以て供養」することを、遠藤は、林を中心とするホテルのサービス・運営側の人々だけでなく、それを受ける側にある宿泊客や来訪者にも求めているのではないだろうか。「西の迎賓館」での飲食であれば、「種々の珍菓美酒」が提供されるであろう。そして、「顕」としては、直接にホテル側がそれらを客にサービスし、客はそれを受ける。受ける側からすると、ホテル側に「種々の珍菓美酒」を依頼し、準備してもらっている。そこに、「幽」として、大黒天へ感謝と共に真心から捧げる「供養」の意味を込めることが、大黒天が約束する「甘露の雨」の条件であると捉えられるのではないだろうか。そして、甲子園ホテルは、密教寺院、ホテル従業員は林が統合する僧侶、宿泊客は信者に喩えられよう。

そのような観点からリーフレットをみると、そこに描かれた流水紋は、恵みの雨をたっぷりと含んだ雲と捉えられ(図4-5)流水紋の本来の意味との矛盾が無い。そして、表紙の流水紋は、左右に無限に伸びている(図4-5)。さらに、リーフレットを開くと、それは裏表紙の流水紋(図5-3)とも中央で繋がっており、横長の紙面を十分活かし特徴づけている。折りたたんだ場合は、表紙に2本の塔のうち的一本と、打出の小槌の半分を見せ(図4-7)、それが、表現全体にとって最小限の一部であることを示す。それは、一部分を切り取って全体の大きさや広がりを感じさせる日本の伝統的な表現手法といえるだろう。したがって、流水紋は、自ずと、阪神間や近畿一円に限定しないで無限に広がり、日本さらには世界を覆うという表現に向かっており、この表現の意図こそ、天に配置した打出の小槌つまり大黒天の心と考えられるのである。



裏表紙

表紙

図5-3 開業当時のリーフレット(開いた状態の表側)

このことから、遠藤は、ホテルの周辺地域に限定せず、日本、さらに世界中の人々にむけて、大黒天の恵みの雨がもたらす豊かな暮らしを祈ったと考えられる。そのために、林たちホテル側で働く人々だけでなく、宿泊客である国内外の賓客や各界の第一人者にも、「一擲三外」して、すべての迷いや執着心を投げ捨てて「利他」の心になることを願い、それを2本の塔に込めたのではないかと思う。「利己」を完全に捨てきることは、簡単にできることではない。通常、困難を伴い、厳しい修行が必要な所以でもある。一方、大屋の花苑都市と海岸のホテルにおける飲食に関しては、「利他」の対象となる人々に対して、このような厳しさを前提とする希望を読み取ることはできない。

(2) 形態表現の意図と特徴

ランドマークとしての塔が持つ意味と役割は、建築の形態表現に対応すると考えられる。帝国ホテル（1923）を、師・ライトに代わり完成させねばならなくなった時、最も高い宴会場の寄棟屋根の頂天に取り付ける棟飾りの形態を決めるにあたり、遠藤は悩み抜いた。その様子について、帝国ホテル孔雀の間の壁画を担当した繁岡ケンイチ（鑒一、1895 - 1988）が、次のような記述を残している。

「初めの像は、翼を広げた女神の像だったが、今のは何だか解からない。高いところに取り付ける形状のは寸法の割合が中々難しく遠藤氏も再三研究され現場から日比谷からと変えてみては直したが解決されないままになったものだ⁵⁻⁶⁾」

すでに客室棟の半分はできているので、後は同じように造ればよい、というような簡単なものではなかったことが、繁岡の言葉から推察される。遠藤が自分の判断に満足したかどうかは分からないが、最も高い位置にある装飾が、遠くから、近くから、実際にどう見えるか、34歳の若き遠藤が、ランドマークの一環として懸命に検討したことが伺える。

また、遺作となった目白が丘教会（1950）の塔については、遠藤新のもとで実際に設計に携わった三男・陶が以下のように、その行動を伝えている。

「会堂のコンクリートが打ち上がった日、現場に出かけた新は、何を思ったのか、突然、屋根の上に上がると言い出して聞かない。危険だからと周囲は制止したが頑として受け付けず、前後に介添えの人を付け、丸太を組んだだけの細い足場板の上を、とうとう屋根まで上がってしまった。

屋根に上がった新は、しばらくの間、棟に腰を下ろして気持ちよさそうに辺りを眺めていた。そうして帰りがけ、「塔の高さを2尺（約60cm）下げよう」と言い出した。塔全体のプロポーションがどうしても気になったのだ。

スケールとプロポーションの綿密な関係を、新は体で実証しながら作品に生かしたのだ⁵⁻⁷⁾。」

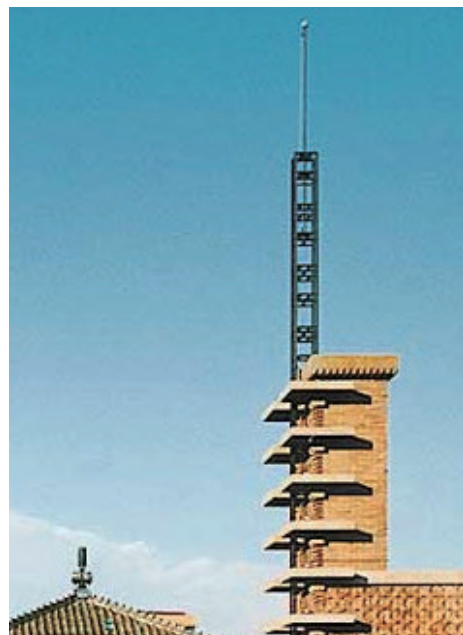
この時の遠藤は61歳、最晩年であった。しかも、満州からの引き上げ以来、心臓を患っていた。それにもかかわらず、丸太を組んだだけの細い足場板を自ら屋根の棟まで登って行ったという。翌年、自らの葬儀がこの教会で行われることになることになると覚悟していたかどうかは伺い知れない。また、そば近くで設計活動を共にしても、建築家の設計意図の真意はなかなか分からないものかもしれない。いずれにしても、建築家として独立したばかりで

師から委ねられた超大作と、自らの遺作のそれぞれの現場のエピソードにおいて、ランドマークとして空に繋がる高所部分の形態をどのように決定するかについて、苦心と工夫を惜しまない姿勢が共通している。

これらの作品の間に位置する甲子園ホテルの場合もまた、例外ではなかったと推察される。特に、2本の塔には、「環境を一括した統合が完了する」という役割を担わせるというのであるから、なおさらではないだろうか。そう考えると、現在、両方の塔から失われている水平の金属棒の存在の重要性が浮上するのである（図5-4）。この水平金属棒は、当然開業当時には両方の塔に存在し、リーフレットの表紙にも描かれている（図4-7）。しかしながら、敗戦後の米軍接收時には、片側のみとなっていた。そして、大学の校舎となった時点で両方とも取り去られたことが当時の写真から判断される。



A: 竣工時の状態（水平金属棒が存在）



B: 現在の状態（水平金属棒が不在）

図5-4 甲子園ホテル・塔上部の形状の比較

一方、遠藤自身、「甲子園ホテルの場合」において、2本の塔は、建築の水平性を「破調」して垂直性をもたらすと述べているが、形態に関する記述はそれ以上残していない。しかしながら、もし、垂直性をもたらすためにのみ塔が存在するなら、金属棒によって再びそこに水平性を加える必要は無いのではないだろうか。もちろん、次男・陶が言うようにスケールとプロポーシオンから、建築家として直感的にバランスを決めるという側面はあろう。これらのふたつは、建築形態を決める際に遠藤が重視した要件であるし、ライトの愛弟子でなくとも建築家なら細心の注意をはらうところではないかと思う。

しかしながら、ここでもう一度、塔についての遠藤の記述を、密教と「利他」という観

点から振り返ってみたい。

「そこで二本の塔（実は煙突）が強く破調する。

静かに俯して居たものが一擲三外して忽焉として天心を仰ぐのです」

もしも、「忽焉として天心を仰ぐ」だけなら、それは、特別な条件なく大黒天に祈ることであるから、その場合の祈りは当時の御利益信仰、つまり「利己（自利）」の心の状態であろう。同時に、塔には特別な表現を加えることなく垂直に天に向かわせるだけでよいのかも知れない。しかしながら、先にみたように、天心を仰ぐための条件は、「一擲三外」し「利己」の心を取り去って「利他」の心になることである。そして、「利他」は「利己」に対して利する方向が逆転することから、垂直性に対する水平性の表現が選択されるのではないだろうか。

客室棟の両翼の屋根が葺き終わった段階で撮った現場写真の上に、遠藤が2本の塔を描き込んで検討したスケッチが残されている（図5-5）。写真は南側からの撮影なので、この場合は、南側を重視して検討していると判断される。寺院の大祭に用いる幡を取り付けているようにも見えるし垂直にバナーを垂らす趣向とも読み取れて今後の課題であるが、遠藤の検討の足跡として注目される。いずれにしても、開業当時のリーフレットの表紙の塔は北に向いて描かれており（図4-7）、遠藤は北側に塔の正面性を与えていたと考えられる。また、水平金属棒にバナーを吊ったという記録は今のところ確認されていない。



図5-5 甲子園ホテル施工現場写真の上に遠藤新が手描きした塔のスケッチ

一方、塔が煙突としてボイラー室、厨房、暖炉などの火炎に繋がることから、護摩焚きが想起される。密教の法要は、加持祈祷、特に護摩供養によって特徴づけられる。もともと護摩は、インドではバラモン教において盛んにおこなわれていたが、現世利益を祈る「利

己（自利）」を目的としたものだったという。それが密教において、心の中の「利己」の部分を浄め、本来すべての人々が生まれながらに持っている仏性、つまり「利他」の心を磨き出すための祈りとなったという。密教では、目に見える存在（顕）と見えない存在（幽）とが本来ひとつ、つまり「顕幽一如」である。そうであるならば、目に見えない心の中の「利己」から「利他」への根本的な方向転換のための祈りは、目に見える形として加持祈祷の所作や法具に視覚的に表現されていると考えられる。

そこで、密教の法具をみると、装飾性が高く黄金に輝く法具の中で、簡素で細い「散杖」が注目される（図 5-6 A）。これは、「灑（洒）浄」のために用いる。つまり、浄水のはいった灑水器に先端を着け、それを儀式の空間や法要に参座する人々に散布することによって浄めるのである。宗派・法要の種類によってこれらの法具は異なるし、天台宗や真言宗などの密教だけでなく、曹洞宗や浄土宗などの顕教においても用いられる（図 5-6 B, C）。



A: 散杖（手前）、灑水器（後列右）、塗香器（後列左）



B: 結婚式の灑浄（天台宗）



C: 普山式の灑浄（浄土宗）

図5-6 灑浄の法具と事例

浄めるとは、前述のように、誰もが心の中に持っている仏性を開顕することであり、「利他」の心になることである。したがって、2本の塔に配された水平金属棒は、散杖による灑浄の隠喩として「一擲三外」を表現していると考えられるのではないかと思う。もしそうであるならば、先端に配された水滴のような球体は、浄水（灑水）と捉えることができるだろう（図4-7、5-4）。

甲子園ホテルの正面玄関は、北側中央つまり2本の塔の間にあり、水平金属棒と同じ北側に向いている。したがって、賓客から一般人まで、外国人から日本人まで、個人から家族連れまで、訪れるすべての人々の心を「利他」の心に浄めて迎え入れるホテルということになる。それは、同時に、世界平和の前提条件としての表現でもあることが先の考察から得られる。そして、それぞれに水平金属棒を有する2本の塔は、ランドマークとして望むことができる遠くまで、「利他」の場であることを表現しているといえるのではないだろうか。

一方、大屋霊城のホテルにおいて、ランドマークとしての建築表現を読み解くことはできない。先に見たように、大屋のホテルは遊覧地の「よびもの」として、甲子園駅に降り立つ人々の前に開けたヴィスタラインの上になつている。しかしながら、その高さを決める塔は、海辺の烈風を考慮し、費用を節約するための「装飾高塔」という以外の役割を託されていないからである。

6. 結び

本稿は、仏教的、特に密教的「利他」と、生活環境全般の計画や設計が本来備えている「利他」との間に、どんな違いがあるか、という問いを動機とするので、最後にこのことについてみておきたい。

日本の仏教は、大乘仏教である。同じ仏教でも上座部仏教とは違って、「他者を利する」つまり「利他」が基本である。その「利他」は、大屋霊城の花苑都市におけるホテルと、林愛作・遠藤新の甲子園ホテルの比較において、それぞれが対象とする滞在客に提供するアクティビティへの配慮において読み取れるものだった。

特に、甲子園ホテルの客室部分には、ホテル滞在の空間体験を特徴づける「分かち合い」がみられた。国内外の異なった文化・社会的立場・性別・年齢の人々が、同じ屋根の下で十分なプライバシーとサービスを受け、それぞれの生活様式に対応した空間を拠点に「東洋的」な建築美、伝統的な景観美を「分かち合う」。穏やかな「分かち合い」は、世界の「平和」に通じるし、仏教における「利他」の様相としての「融和・和合」に相応すると思う。大乘仏教は、争わず、排除せず、遍く「他者」との「融和・和合」を尊び、その実践として、自らにとって価値ある利便・利潤・歓楽などの「分かち合い」を尊ぶからである。ひとつ屋根の下にある空間の「分かち合い」に対応するような意図は、大屋のホテルには見られなかった。

さらに、伏流水による水源地との関係をみた場合、花苑都市の園芸場は、水源地と共に「飲食」の源つまり、「生命」の源であるという意図が推察された。しかしながら、水源地からの水を供給する対象は、花苑都市に限定されるのか、周辺地域に及ぶのかを判断する手がかりは、大屋の記述にも図面にも見つけることができなかった。

一方、甲子園ホテルと水源地を関係づける記述もまた、見つけることはできない。しかしながら、それは、まさに、甲子園ホテルの1階に位置する水盤から読み解けるものではないかと思う。そこに湧き出る水の表現は、伏流水の湧出を想起させ、しかも打出の小槌の装飾を伴う。ここにも、打出の小槌によって霊力を得た「豊穡の水」が、ホテルから出発して甲子園開発地と周辺地域を潤す「利他」の物語が読み取れるのではないかと思う。今回の考察から、甲子園ホテルの建築表現は、天からの恵みの雨だけでなく、地下から湧き出る水の「分かち合い」をも表現しているという結論を得た。同時に、そこには、「豊穡の水」をホテル内外の多くの人々と分かち合う「融和・和合」があるといえる。

大乘仏教の根本をなす密教では、「顕幽一如」つまり、目に見える存在である「顕」と、その背後にあってそれを存在させている目に見えない存在としての「幽」は、一体であるとする。「顕」として、秘仏などの尊い存在を拝すること自体、誰にでも許されるものではないとされるが、特に、「幽」の部分は、出家した僧侶が修行を経て知り得る秘密とされるので、もちろん在家に語ることはできない。したがって、仮に秘仏とされるような仏像を在家の身で見ることができたとしても、その意味を深く知ることは困難を伴うであろう。林と交流のあったアーネスト・フェノロサの出家の理由ではないかと思う。

このことと、先の考察を考え合わせると、キリスト教徒であった林や遠藤が、もしも、世界の「平和」や「分かち合い」、あるいは打出の小槌による大黒天の霊力を「利己（自利）」ではなく「利他」へと振りむけてホテルを企画・設計したにも関わらず、それを言葉にして語らず、文章にして記述していないのであれば、その姿勢は、密教美術に対する出家僧のあり方に似ており、密教的であるといえるのかもしれない。例外ともいえる手がかりとして、本稿では遠藤が文字として遺した「一擲三外」を「一擲三界によって三界の外に出て利他の心となる」と解釈することによって、大黒天の恵みの雨は、ホテルに働く人々だけでなく、滞在する人々の心の状態をも前提としているのではないかという考えに至った。つまり、甲子園ホテルの2本の塔には、滞在するすべての人々が「利己（自利）」を捨て去り「利他」の心で祈ることによってこそ、大黒天は、ホテル周辺地域を越えて日本さらには世界に遍く豊穡の雨をもたらし、それが世界平和に通じていく、という遠藤自身の祈りが込められていると考えられる。このことは、打出の小槌をモチーフとする装飾と建築空間の関係を観察することを通じて仮説として得た遠藤新の設計意図・「豊穡の水」の物語を補完するとともに、甲子園ホテル全体の建築表現の根本をなすものでもあろう。

特に、2本の塔のそれぞれに配置されていた水平金属棒（図5-4）については、ホテルを訪れるすべての人々の心を浄め、「利他」を呼び起こす灑浄の意味が込められていると捉えられる。それがあってこそ、ランドマークとして、甲子園ホテルに込められた「利他」の

祈りの表現を遠くまで届けていたと捉えられる。大屋霊城のホテルのランドマークとしての「装飾高塔」には、構法と予算に関する意図以外は読み取れないことと対照的である。これらの水平金属棒が、現在、両方とも塔から失われた状態であることは、遠藤の設計意図の根幹を示す表現形態であるばかりでなく、ホテルが完成した当時の国内外の政治・経済情勢を考え合わせ、文化財保存という観点から、非常に残念なことではないかと思う。

謝辞

多くの方々のご助言とご助力を頂くことで、この拙い論考をまとめることができました。特に、本稿は、天台宗の信仰の基に、若き宗祖最澄と大黒天との出会いの伝承が存在するという事実を前提としています。このことに関して、『溪嵐拾葉集』をはじめ、活字化された資料をお示しくださった比叡山延暦寺教化部・部長小鴨覚俊氏に心から感謝申し上げます。また、大黒天の甘露の雨については、大谷大学附属図書館において閲覧させていただいた『天台宗祈願作法手文』において確認がなかったことを深く感謝申し上げます。

林愛作の平和への思いは、御令孫である林裕美子氏から、遠藤新の建築家としての姿勢は、御令孫である遠藤現氏からの原資料のご提示とご助言より、遠藤新の平和への思いは、東京大学建築学科図書館で閲覧させていただいた卒業論文“Description on City Hotel Design”から、遠藤新の甲子園ホテルへの敷地および林愛作への思いは、コロンビア大学エイヴァリー建築・美術図書館で閲覧させていただいた書簡から、一層の確信を得ることができました。深く感謝申し上げます。

また、本稿は、研究室の所属学生の皆さんと卒業研究のために取り組んだゼミで着想したことがもとになっています。こうして新たに論考としてまとめることが出来た喜びを感謝と共に分かち合いたいと思います。そして、その過程で、資料提供と助言をくださった武庫川女子大学甲子園会館庶務課の皆様、心から感謝申し上げます。さらに、遅筆と加筆に辛抱強くお付き合いくださった武庫川女子大学生生活美学研究所の皆様、深く感謝申し上げます。

なお、本稿の内容に関する責任は、すべて筆者にあります。誤りは正し、少しでも真実に近づけるようにと思っています。

【参考文献】

1. 大屋霊城 1919「街道樹論(1)-(4)」『建築と社会 第2巻7-10号』日本建築協会、
2. 大屋霊城 1923「進め過群より花園へ(1)-(6)・(畢)」『建築と社会 第6巻1-6号、8号』日本建築協会
3. 大屋霊城 1926「二つの花苑都市建設に就いて(上)」『建築と社会 第9巻12号』日本建築協会、(上)に対する(下)は未確認
4. 林愛作 1927.7.31「理想的なホテルー忘れてはならぬお客様の目と心と胃と財布」『サンデー毎日』

5. 遠藤新 1930 「甲子園ホテルについて」『婦人之友 (1930. 6)』婦人之友社 p. 31-32
6. 遠藤新、1936 「甲子園ホテルの場合」『婦人之友 (1936. 9)』婦人之友社「庭」の頁
(頁番号なし)
7. 遠藤新 1914 卒業論文 “Description on City Hotel Design” 東京帝国大学
8. E002A09, Columbia University Avery Architectural & Fine Arts Library,
Correspondence from Arata Endo to Frank Lloyd Wroght, 1929. 5. 8
9. E002C06, 同上, 1930. 7. 16
10. Who was who ワーキング・グループ (編) 1986 「都市計画 Who was who
(都市計画史研究の魅力と方法<特集>)」『都市計画 144』日本都市計画学会 p. 65
11. 清水 正之 1997 「論客 大屋霊城 : 初代の緑の都市計画家」『ランドスケープ研究 :
日本造園学会誌 60(3)』日本造園学会 p. 203-206
12. 佐藤昌 1977 『日本公園緑地発達史 上下巻』都市計画研究所
13. 日本経営史研究所 (編) 1985 『阪神電気鉄道 80 年史』凸版印刷、
14. 阪神電気鉄道株式会社臨時社史編纂室 1953 『輸送奉仕の 50 年』凸版印刷
15. 鳴尾村誌編纂委員会 2005 『鳴尾村誌』「西宮市鳴尾区有財産管理委員会」
16. 橋爪紳也 1992 『海遊都市—アーバンリゾートの近代』白地社
17. 橋爪紳也 2005 『あったかもしれない日本—幻の都市建築史』紀伊國屋書店
18. 植之原万里代 2009 卒業論文 『甲子園ホテルに関する研究—3 つの図面の変遷から遠藤
の意図を探る』武庫川女子大学
19. 藤本陽子 2010 卒業論文 『甲子園ホテルの佇まいに関する研究』武庫川女子大学
20. 横山千帆 2013 卒業論文
『甲子園ホテルの変遷—当時のパンフレットからみる経営方針』武庫川女子大学
21. 黒田智子 2016 「甲子園ホテルのシンボルマーク・打出の小槌の意図と背景
—開業当時のパンフレットに着目して」
『武庫川女子大学 生活美学研究所 紀要第 26 号』p. 129-150、
22. 黒田智子 2016 「甲子園ホテルの企画・設計理念の背景
—「利他」と「利己」をめぐる試論」
『武庫川女子大学 生活美学研究所甲子プロジェクト報告書第 1 号』武庫川女子大学
23. 黒田智子 2017 「遠藤新の卒業論文 “Description on City Hotel Design”
—1914 年に描いた理想のホテルの理念と背景—」教育・研究誌
『生活環境学研究第 5 号』、武庫川女子大学
24. 「大湯池 ポンプ揚水 けふから着手」『朝日新聞 (阪神版) 1929. 7. 2』
25. 遠藤新建築創作所 『甲子園ホテル原案 (プレゼンテーション図推定) 1928. 9. 10』
武庫川女子大学 甲子園会館所蔵
26. 遠藤新建築創作所 『甲子園ホテル新築設計図 (着工図か) 1929. 5. 28』武庫川女子大学
甲子園会館所蔵

27. 遠藤新建築創作所『甲子園ホテル竣工図 1930. 4 (推定, 開業は 1930. 4. 15)』
武庫川女子大学 甲子園会館所蔵
28. 株式会社大林組『武庫川女子大学甲子園会館 改修工事 2006-2009 (CAD 図面)』
武庫川女子大学 甲子園会館所蔵
29. 鉄道省 1934『観光地と洋式ホテル』鉄道省
30. 即真尊龍・谷玄昭 2004『天台宗祈願作法手文卷二諸尊祈願作法』四季社
31. 遠藤陶 1997『帝国ホテルライト館の幻影—孤高の建築家遠藤新の生涯』廣濟堂出版
32. 密教辞典編纂会 2007『密教大辞典』法蔵館

【注釈】

- 1-1) 参考文献 22
- 2-1) 参考文献 14, p. 160, 上 1. 11-18
- 2-2) 同上, p. 171, 下 1. 6~15
- 2-3) 参考文献 9,
- 2-4) 参考文献 21,
- 3-1) 参考文献 3, 2つの花苑都市とは、甲子園と藤井寺に提案した計画である。(上)では、甲子園開発地に対する計画を紹介している。しかし、『建築と社会』に、(下)を
発表した号は見当たらなかった。
- 3-2) 参考文献 2, の(5) 6巻5号 p. 62, 下 1. 6-9)
- 3-3) 同上, (5) 6巻5号 p. 62, 下 1. 10~p. 63, 上 1. 1)
- 3-4) 同上, (4) 6巻4号 p. 62, 上 1. 12-17)
- 3-5) 同上, (8) 6巻8号 p. 39, 上 1. 20- 下 1. 6)
- 3-6) 同上, (8) 6巻8号 p. 39, 下 1. 8, 9)
- 3-7) 同上, (8) 6巻8号 p. 37, 上 1. 10, 11)
- 3-8) 同上, (8) 6巻8号 p. 39, 下 1. 12-17)
- 3-9) 同上, (5) 6巻5号 p. 61-69、大屋は、過密な集住から人々を解放しようと果敢に実践した先達としてハワードを敬愛していた。一方で、ハワードの前後にいた他のパイオニアの中にハワードを位置づける客観性を持っていた。また、大屋は、ハワードのガーデンシティがもつ、面積の限定、職場として工場などを併設、周囲を広大なグリーンベルトで囲むなどの条件に懐疑的だった。そのような条件のために、居住者が適正な規模に至らないというのである。一方、ガーデンサバークは、そのような条件抜きに、住宅の集合によって成長するところに可能性を見ていた。ガーデンサバークの条件は、一定面積に建設しうる住宅の個数に制限を加えて、過密な生活環境つまり「過群」を避ける。そのために土地を所有せず、上下水道は、隣接の大都市から援用する。ガーデンヴィレッジは、工場主が、自分の工場で働く労働者のためという狭い対象に計画実施したもので、環境としては、ホトンとガーデンサバークと変わらないと捉え

ている。)

- 3-10) 同上. (8), p. 37, 上 1. 14-下 1. 4 ドイツの諸都市の郊外にみられ、大屋も視察した。
小屋を併設した果樹園、蔬菜畑が集合したもので、大屋は、労働者階級の心身の回復に大きな効果があると考え、「日々楽園の中に暮らしている」と評している。
- 3-11) 同上, (8) 6 卷 8 号 p. 37, 下 1. 9-16
- 3-12) 参考文献 3, p. 23, 下 1. 5-13
- 3-13) 同上, p. 24, 1. 9-16
- 3-14) 同上, p. 24, 1. 25~p. 25、1. 2
- 3-15) 同上, p. 25, 1. 6~1. 10
- 3-16) 同上, p. 29, 1. 6~1. 8
- 3-17) 同上, p. 29, 1. 10~1. 14
- 3-18) 同上, p. 29, 1. 22~1. 26
- 3-19) 同上, p. 30, 1. 8、9
- 3-20) 同上, p. 29, 1. 2~5
- 3-21) 同上, p. 29, 1. 11~18
- 3-22) 同上, p. 29, 1. 8~11
- 3-23) 同上, p. 24, 1. 19~24
- 4-1) 参考文献 21, pp. 130, 131
- 4-2) 参考文献 4,
- 4-3) 参考文献 20,
- 4-4) 参考文献 4,
- 4-5) 参考文献 8,
- 4-6) 参考文献 13, p. 209, 1. 19, 20)
- 4-7) 参考文献 12, p. 170, 下 1. 19-p. 171 上 1. 3)
- 4-8) 同上, p. 171, 下 1. 20-p. 172 上 1. 1)
- 4-9) 参考文献 2, の (6) 第 6 卷第 6 号, p. 48, 下 1. 2-20)
- 4-10) 参考文献 1, の (2) 第 2 卷 8 号, p. 57, 下 1-10)
- 4-11) 参考文献 24,
- 4-12) 参考文献 13, p. 162, 1. 10-13)
- 4-13) 同上, p. 209, 1. 21-23)
- 4-14) 参考文献 14, p. 26, 1. 1-3)
- 4-15) 参考文献 3, p. 30, 1. 15-20)
- 4-16) 参考文献 14, p. 171, 1. 2-5)
- 5-1) 参考文献 21,
- 5-2) 参考文献 7,
- 5-3) 参考文献 6, 1. 15-18

